
千紫万紅

なまはげ秋田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千紫万紅

【Nコード】

N6767B

【作者名】

なまはげ秋田

【あらすじ】

千紫万紅〓色々な色彩によりあざやかに見える景色、風景、人生。

其の一 紺碧（こんぺき）

「斬鉄姫、勝負しろ。」

紺碧の空にアドニス声が突き刺さる。

ラッセン包囲戦。

奇襲は成功した。

後は、敵の司令官を討ち取ればいい。

他の將軍達が斬鉄姫をどう扱うかは知らないし、自分には関係ない。斬り姫と名高いセレスと勝負する、それだけだ。

「受けるわ。」

凜とした声が空気を割る。

鎧に身を包み、剣を携えた細い影が見えた。

来やがった。てめえを斬ってやる。

今から始まる一騎打ちにアドニスは

黒ずくめの鎧の中で静かに昂揚した。

鳥肌がたち、背中がゾクゾクする。

この俺がこうまでなる相手は数少ないぜ、お姫さん。

喧騒の最中の静寂。

アドニスとセレスは対峙する。

周りは、当代随一の勝負に息を呑んだ。

どちらか勝つか、見当もつかない。

「ラッセンの奇襲」結果はほぼ確定している。

何故、アドニスは勝負を申し込んだのか。

セレスは、何故受けたのか。

理由は当事者しか知らない。

城砦の一部が音を立てて崩れた。

それを合図に、二人は動いた。

速い。

戦場で何度か見たことはあるが、
見るのと実際やり合うのは大違いだな。

女だから非力であろうと侮っていた訳ではないが、
腕力の不足を速さと技量で補っていやがる。

アドニスは口の端で笑う。

己の力しか頼れない、強き存在との一騎打ち。

負けたら、死が待っている。

生と死の狭間でせめぎ合い、しのぎを削る。

楽しいねえ。

これだから闘いはやめられねえな。

- - - - -

「お姫さんのくせに、戦士のまねごとかよ。」

あからさまな侮蔑。

初めてセレスの噂を聞いたとき、一言で切り捨てた。

王族の女なんてのは、城で大人しくしてりゃいいんだ。

弱っちいくせに、戦場にしゃしゃり出たら

周りが迷惑するだけだろ。

セレスが戦場で剣を振るう姿を初めて見て、考えが変わった。

「じゃじゃ馬だ。」

次に見たときは

「じゃじゃ馬どころか暴れ馬だな。」

そして

「俺が斬ってやる。」

アドニスの黒い刃はセレスに向かって斬りかかる。

「てめえ、何で戦場に出るんだ？」

セレスは絶妙な力加減で受け流し、
間髪いれずに上段から剣を振り下ろす。

「私はこの生き方しか、知らないから。」

アドニスは剣を下段からすくい上げ、相手の軌道を逸らす。
成る程ね。風変わりなお姫さんだ、斬鉄姫。

剣戟はなおも続く。何時終わるのか、誰も予想できない。

体力勝負になったら、アドニスに軍配が上がる。

いつセレスは勝負に出るのか。

剣を繰り出したアドニス。

受け流し、水平にアドニスの首に斬りかかるセレス。

セレスの剣を勢いよく防ぐ。セレスの手から剣が離れた。

もらった！

アドニスが思った瞬間、

セレスはもう一方の手で剣を掴み、

逆手でアドニスの首を刎ねた。

黒い頭部は弧を描き地面に落ちた。

アドニスの胴部は空を仰ぐ。

セレスは、自分の剣を地面に付き立てて、我が身を支えた。

「捕らえよ！」

ロゼッタの将軍、エルドの声が静寂を破り、喧騒が再びラッセンを
支配した。

- - - - -

夜が辺りを包み、誰も居なくなつた戦場に一つの光が降りる。

アドニスと剣は既に無い。

だが、アドニスは留まっていた。

だから、戦乙女は来た。

「アドニス、エインフェリアになるか？」

「ああ？」言外に拒絶するアドニス。

「そうか。なら仕方無いな。」

意を汲み取り、戦乙女は去ろうとした。

「おい、一寸待て。」

「何だ？」

「俺をエインフェリアにしようとする理由は？」

素朴な疑問を口にした。

戦乙女は一言、

「強いから。」

単純な理由にアドニスは呆れた。

戦乙女とは、こんなだったか？

まあ、他にも思惑は有るだろう。

ここは敢えて乗ってやるか。

「なら、俺は相応しいな。エインフェリアにしろ。」

傲慢に言い放つ。

戦乙女は可笑しそうに答えた。

「確かにそうだ。」

小さな光となつたアドニスに、戦乙女の両手が伸びる。

「アドニス、私と共に在れ。」

- - - - -

「そもそも女神のくせに、戦がらみかよ。」

召喚を受けながらアドニスは吐き捨てた。

「私は戦乙女だからな。神族として他の在り方は知らん。」
どっかの誰かと同じ事を言いやがる。

だが、神族のクセに人間に転生するんだろ？

てめえも風変わりな女神だな、おい。

「お前の方が風変わりだ。名は体を現す、と言うが
アドニス、自身と名前が全く一致していないぞ。」

悪戯っぽい戦乙女の言葉。

「・・・油断なんねえ。」

不敵に、そしてどこか面白そうにアドニスは呟いた。

- - - - -

そして月日は流れる。

紺碧の空の下、異形のモノと対峙する中
二人のエインフェリアが会話をしていた。

「てめえか。あの時は不覚を取ったが、次はねえぞ。」
「私が勝てたのは偶然の産物。もう一度闘えと言われても、困るわ
よ。」

其の二 紫黒（しこく）

「この腐れた運命から俺を放つと言ったな。」
解放の時、アドニスは聞いた。

「もちろんだ。」戦乙女は答える。

オーデインに対抗するなど、前代未聞だ。
だが、それをやろうとするヴァルキリ！。
自分以外のエインフェリア達の顔ぶれをみるにつけ、
只者ではないとは思ったが。

ヴァルハラに於いても、規格外の存在だった。

傭兵として渡り歩き、色々な雇用主を見てきたが
ここまで毛色の変った雇用主は初めてだ。

まあいい。俺の雇用期間は終わった。

「後は適当にやるんだな。」

解放の時を迎えながら、アドニスは呟いた。

- - - - -

アドニスはヴィルノアの民家で過ごしている。

とはいっても、現実問題食べていかなくはならない。

以前生きていた頃とは様子が随分違う。

戦乱の中であれば、傭兵として生きていけるが、今はそうはいかない。
い。

用心棒、商人の護衛などをして生計を立てているのだ。

ゾルデまでの護衛を頼まれ、提示された金額も破格だった。
断る理由は無いか。

アドニスは剣を見た。

以前自分が携えていた重戦士の大剣とは違う、一般兵が持つ剣。なまくらでも剣は剣だな。

コイツは正直だ。

己の力量に見合った答えしか出さない。

盗賊や不死者、異形のモノ達を倒しながら旅を続ける。

そうこうしている内にゾルデに到着した。

辺りは暗くなっている。人気も少ない。

ディパン崩壊の余波で貿易港としての利用価値が低くなった為だ。

それでも、商人達は新たな取引先を開拓して復興しようとしている。

したたかで、強靱な精神。

「有難う。助かったよ。」商人が謝礼を渡した。

ずしりとした重み。

「夜遅くなった分、割り増しした。ほんの気持ちだが受け取ってくれ。」

返事の代わりに左手を軽く上げてアドニスと別れた。

- - - - -

宿を探して街中を歩く。

一軒の民家で物音がした。

「？」

気にはなったが関係ないと思い、通り過ぎようとした。

「だ・・・」短い女の声。聞き覚えのある声だ。

続いて複数の物音。

民家の明かりは消えている。

アドニスは玄関の扉に手を掛けた。鍵が掛かっている。

剣を扉と柱の間に差し込み、一気に振り下ろす。

静かに扉を開き、獣のように暗い部屋に入る。

眼を細め辺りを窺う。

三人の人影の下で白い腕がもがいている。
昔、戦いが終わった後、よく見た光景。
赤錆色の髪が見えた。

無言でアドニスは人影の襟首を掴み、引き離す。
相手が殴り掛かって来た。

片手に剣を持ちながら拳をかわし、一撃です。
馬鹿か。誰を相手にしてると思っでいやがる。
二人ほど殴りつけると、人影達は逃げ出した。
最後の一人が扉をくぐろうとする。

アドニスは剣を投げつける。

刃は水平に柱へ喰いついた。人影の首と紙一重の差しかない。

「ひいいい」顔半分を覆う布の下で呻き

雑魚は全員逃げ出した。

「誰？」警戒を解かずに女は問いかけた。

無言で扉に向かうと、アドニスは剣を抜いた。
鞘を拾うと扉を閉め、剣を門の代わりにする。

女は何かを掴んだ様子だ。

取り敢えず灯りを点けようとアドニスはテーブルに向かった。
女は殺気を放つ。

この感覚。てめえか。

やはり無言でテーブルの上の小さなランプに灯を点す。

辺りの様子が薄暗くアドニスの眼に映る。

斬鉄姫は箒を構えていた。

「俺だ。」

聞き覚えのある声。

「アドニス？」

ほの暗い中で見える姿は黒衣一色。

瞳は、赤銅色をしている。

かつて兜の下で不気味に光った、血を帯びた色。セレスは驚いた。何故貴方が此処にいるの？

黒髪は後ろに撫で付けてある。

「貴方、髪まで黒かったの??」

アドニスの眉間に皺が寄る。

精悍な顔立ち。高い鼻梁。俗に言う強面。

だが緩やかな弧を描く眉は若干細めだ。

そのせいか、細面の印象を見る者に与える。整っている、と言っていていいだろう。

「おい、まず礼を言うのが筋じゃねえのか。」
不機嫌そうにアドニスは言った。

「あ、そうね。ありがとう。・・・助かったわ。」

この様子なら未遂か。

セレスはほっとしたのか、構えを解いた。

その手が小刻みに震えている。

「不細工なナリだな。」

アドニスは箒を取り上げようとして手を伸ばす。

セレスは思わず身を固めた。先程までの恐怖がまだ残っているのだ。着衣は乱れ、何本もの赤い爪痕が見える。

アドニスはため息をついた。

「湯に入って、その不細工なナリを何とかしろ。」

「・・・そうするわ。」セレスはゆっくり踵を返した。

奥の扉へ向かって歩いていく。

斬鉄姫ともあろう者が、なんてザマだ。

俺が闘ったのは、あんな無様な女じゃ無かった。

薬箱を探しながらアドニスは落胆していた。

しかも、何故か散らかった部屋を片付けている。ため息が再び出た。

- - - - -

一通り片づけを済ませ、薬箱をテーブルの上に置いてアドニスには椅子に座った。

肘をつき、小さなランプの灯を見つめ、指で卓を叩く。片付ける前の部屋は本が散乱していた。

歴史書だったな。過去に囚われているのか。

順応性が低すぎる。

元王族なら仕方ないか。

戦場と城しか知らない女。

奥の扉が開く。

湯から上がって寝間着の上にショールを掛けた斬鉄姫は、ほくほく湯気を立てている。

少しは落ち着いた様子だ。

アドニスは自分の横の椅子を黙って指し示す。

セレスは椅子に座った。

「傷を見せる。」薬箱を開けながらアドニスは言った。

「え??悪いから遠慮しておくわ。」

慌ててセレスは言った。

「殴るぞ、てめえ。」声が殺気を帯びる。

「御免なさい。」ほくほくの斬鉄姫は観念したようだ。

素直に自分の非を詫びる所に育ちの良さが現れる。

美德ではあるが、悪意を持つ者には隙を与える事になるって解らねえのか、てめえは。

鎖骨から胸にかけて引つかき傷がある。

肩にも。抵抗した痕だ。

薬をつけながらアドニスは唸った。

「くだらねえ輩に傷なんか貰ってんじゃねえよ。」

「突然プロポーズしてきて、すぐ断ったのよ。」

そしたら……。何が何だか、私もよく解らなくて。」

チツ、これだから、生粋の世間知らずは。

「背中。」

セレスは椅子に座り直った。

「終わりだ。」

「ありがとう。」

「湯冷めするから、もう寝ろ。俺は湯を貰う。」

「あの、アドニス。家は小さくて、客間が無いのだけど。」

「・・・ソファで寝る。」

言つとアドニスは奥の扉へ向かった。

- - - - -

湯から上がると、上着を椅子に掛け

髪を撫で付けながら辺りを見回す。

窓際のソファに布団が畳んで置いてある。

夜は冷える。客間は無いと言った。

三度目のため息をアドニスは吐いた。

布団を抱えると、寝室の扉を蹴って開ける。

寝台から、セレスは跳ね起きた。

案の定、肌布団だけだ。

「寒いから、こっちで寝る。」

有無を言わず布団を寝台に置いた。

質素な寝台。戦場に慣れているとはいえ、生活環境が随分違う。

解放からの人生は容易いものではないだろう。

扉を閉めて寝台に上がる。

「それなら、私がソファ―に」

「ちよろちよろするな。俺は寒いんだ。」

慌てて寝台から降りようとするセレスを捕まえると
アドニスは布団を掛けた。

片方の手で肘枕をつく。

「こっちを向け。」

赤錆色の頭と背中中は動かない。

「ちつとは気を付けろ。」

セレスの肩と二人の間の空気が震えた。

「不細工だな、おい。」

「私は、元々不細工だわ。」

王族として、姫としての生き方をしなかった。

愛する夫の子供を産むことが出来なかった。

そして、ラッセンの奇襲で生き残ってしまった。

「泣ける時に泣いとけ。」

戦士は食べれる時に食べ、眠れる時に眠る。

次にその時が来る保障は無いからだ。

「あの人と・・・同じ事・・・言うの・・・ね。」

あの人？ラッセンの領主か。

「男の目の前で、他の男の話をするのは失礼だろうが。」
そして沈黙。

「失礼・・・しまし・・・た。」

泣き笑いしながらセレスは答えた。

月は紫黒の中天から降りはじめ。

女は静かな寝息を立て始めた。

アドニスは、布団の中にもう一方の腕を滑り込ませると
セレスの腰に廻し、冷えた寝間着に擦り寄る。

―子供だ―

戦士は眠れる時に、眠る。
アドニス は 瞼を閉じた。

其三 灰白色（はいかいしょく）

アドニスとの突然の再会から数カ月後。

明け方、セレスは目を覚ました。

あの再会から、朝早めに起きて散歩を始めたからだ。

戦乱とは違う身の危険がある、と言う事を思い知らされた。

王城と戦場に自分は守られてきた。

市井に一人で住むという事は、それなりの危険がある。

身を守る為には、以前の身体能力が必要だ。

身を起そうとする。腰が重い。

布団をめくってみると、腕がのっかっている。

背中も妙に暖かい。

え？？

そろそろと後ろを見ると黒い頭が見えた。

「ア、 アドニス？！」何故貴方が又、此处に居るの？？

後ろでアドニスは不機嫌そうに唸る。

「俺は・・・昨夜、遅かったん・・・だ・・・静かにしねえと・・・ぶん殴る・・・ぞ」

本当にぶん殴られそうだ。セレスはゆっくり元の体勢に戻る。

「・・・私、朝の散歩に行くわ。」

返事が無い。

腕が離れて、黒い頭は寝返りをうった。

「ありがとう。」

セレスは寝台から離れた。

箆笥から静かに衣類を出すと、寝室の扉をそっと閉じる。

早朝の空気を吸いながら、セレスは歩く。

冷たい空気。張り詰めた空気。

嫌いではない。

それに散歩は、何も考えなくてもいい。

景色を楽しみ、出会う人と挨拶を交わす。

砂浜が見えてきた。セレスは靴を脱いで両手に持った。

セレスは砂浜を裸足で走る。

重い砂と長いスカートは足捌きを取り戻すのに丁度いい。
打ち上げられた流木を避ける。

目に付いた貝殻を転ばないように膝を曲げて拾い上げる。

次に目に付いた物に貝殻を置く。避ける。

右手、左手。右足、左足。転ばない。

自分の日課をこなし終えた身体は、じんわり汗をかいている。

腰に巻いた布で汗を拭く。

砂浜から離れると、足に付いた砂を払い、

靴を履き家路へと向かった。

- - - - -

鍛錬を始めた頃は出来なかった事が随分出来るようになった。

その事実喜びを感じる自分がいる。

複雑な思いでセレスは玄関の鍵を開き、家の中に入った。

朝食の支度をして、椅子に掛けた替えの上着を持ち、奥の部屋へ入る。

上着を脱ぐと身体の汗を拭いた。

腕も締まってきた。確実に昔の身体に戻りつつある。

居間に入り、椅子に座りお茶を入れてみると、寝室の扉が開いた。

「メシか？」

頭を掻きながらアドニスが起きてきた。

なんだか、馴染んでいる様な・・・。

「食べるの？」

「ああ。」勝手にカップと皿を手にしてアドニスは椅子に座る。自分の目の前でまでもや勝手にお茶を入れ、朝食を食べ始めた。

セレスは疑問を口にした。

「どうして家に？」

「こっちに着いたのが真夜中だ。宿は閉まってんだろ。」

「いえ、そうではなくて。鍵は掛かっていたはずよ。」

何故、貴方が家にはいれるの？」

「俺は鍵を壊したな。で、ゾルデの錠前屋を手配したのは誰だ？」

「アドニスね。・・・貴方、まさか！」

にやり、とアドニスは笑った。

「遠距離恋愛中だと言ったら、勝手に合鍵を作ってくれた。」

いけしゃあしゃあとと言うと、すました顔でお茶を飲む。

「！！」セレスは手をつき、椅子から立ち上がった。

「ゾルデに来た時は、此処に泊まる。」

「・・・勝手に決めないで欲しいわ。」

上目遣いでセレスを見ると、アドニスは凄んだ。

「てめえ、恩人に向かって大層な口の利き方だな。ああ？」

恫喝する声。油断ならない赤銅色の瞳。

容姿もそうだが、腕に至っては物騒どころの騒ぎではない。

危険極まりない。

そんな相手に微塵も怯まないセレスもセレスではあるが。

「思うところがあるから、鍛錬してるんだろ。」

アドニスを見下ろすセレスの瞳が剣呑に光る。

凄む、という点ではこちらも負けていない。

白い肌。色素の薄い緑青の瞳は光によって翠にも、蒼にも見える。

スカピア渓谷で初めて見た雪豹を、アドニスは思い出した。

頭上の岩場から相手の様子を窺う

斑紋を身に宿す、灰白色のしなやかな獣。

隙を見せた次の瞬間、雪上で人間は赤錆色に染まる。
錆びた鉄の色をした髪。鉄は血の味がする。

斬鉄姫、オマエは肉食獣だ。草食獣にはなれねえよ。

「何故、解るの。」低い声でセレスは訊いた。

アドニスは油断ならない。

戦場でも、戦場以外でも。

「身体が締まつてる。六、七割つてところか。」

セレスは椅子に座ると無言で朝食を食べ始めた。

「オマエ、仕事してんのか。」

「教会の書庫の整理をしているわ。」

「剣は？」

「・・・持ちたくないの。」

肘を付き、お茶を飲みながらアドニスはセレスを見ていた。

綺麗な作法。市井に埋もれていても、見る目を持つ人間が見たら育ちが判る。

そして人目を引く容姿。

「護身用でも、持ちたくねえか？」

セレスは口許にカップを持っていく。

答える事を拒否した。

- - - - -

目の前の女は立ち上がり、皿に手を伸ばす。

「置いとけ。後は俺がやる。」

アドニスは言いながらカップをセレスに向かって差し出す。
お代わりをセレスは注ぐと、ソファーに向かった。

ソファアの上で本を袋に詰めだす。
手が止まり、ソファアの端を見た。

アドニスの荷物と剣。重戦士が持つ大剣ではない。

無言で視線を戻すとセレスは本を全部入れ、袋を抱えた。

「俺が怖いかな？」

突然の質問にセレスは振り返る。赤錆色の髪が宙を舞った。

「何故、貴方を怖がらなければならないの？」

アドニスの両眼が僅かに細まる。

「お願いします。」

礼儀正しくセレスは言うのと、ぱたんと玄関の扉を閉めた。

完全に剣を捨てる気だったんだろうが、
あの一件で身を守る必要がある、という事は理解したんだろう。
だから鍛錬を始めた。

身体が以前の感覚を取り戻す。

剣と共に生きた自分も戻ってくる。

「私はこの生き方しか、知らないから。」

斬鉄姫はそう言った。

空のカップをアドニスは指で弾いた。

テーブルの上を片付け、流しに向かう。

あの時、俺はためえに不覚を取った。

次はそっちの番だ。覚悟しとけ。

食器を流しに置きながら片方の口の端を吊り上げて笑う。

「腰を据えてかかるか。」

両手で濡羽色の髪を撫で付けながら

男は教会に出かけた相手に宣告した。

其の四 濡羽色（ぬればいろ）

「オマエ、教会の仕事休め。」

再会から一年近く経ったある日、アドニスと言った。

二人は向かい合って夕食を囲んでいる。

「突然そんな事言われても、困るわよ。」

- - - - -

あれからアドニスはゾルデに来たときは
本当にセレスの家に居座った。

早朝、目を覚ますと背中が暖かったり、
夕方、教会から帰ると、

黒衣黒髪の男はソファーに座ってお茶を飲んだりしている。

セレスの作った晩御飯を初めて見た時は

「男の手料理だな。」と言い放った。

凶星を突かれてセレスは言い返す。

「じゃあ、余所で食べればいいでしょう。」

「うるせえな、メシが冷めるぞ。」

「・・・。」

元王族故の鷹揚さか、はたまた本来そういう気性なのか。（おそらく
両方であろう）

アドニスの来訪をセレスはすんなり受け入れている。

何せ今迄と全く違う生活環境だ。

戦場で生きてきたから、身の回りの事はある程度出来る。

それはあくまで戦場のみでの話だ。

朝起きて夜寝るまでの全てを、毎日自分自身でこなさなければなら
ない。

一般人が当たり前にする事を、元王族は慣れたとはいえ、必死で行っている。

市井での生活という点では、アドニスに分がある。色々な事を教わった。

セレスはその事に関しては感謝している。

「先の話になるんだが」

アドニスは勝手に続きを話し出す。

「商人の護衛で、人手が一人欲しい。腕の立つ奴がな。」

「貴方、護衛の仕事をしていたの？」

初めてセレスはアドニスの仕事を知った。

今迄、アドニスがどんな生活をしているのか尋ねた事は無かった。といえばそれまでだが、訊かない方がどうかしている。

一年近く（僅かな回数ではあるが）

自分の家を我が物顔で居座る相手が、生前見知った相手とはいえ。

そついう大雑把な所がアドニスの好みでもある。

アドニスが傭兵という職業を選んだ理由。

必要事項以外は干渉しない。束縛など、論外だ。

この大雑把さは、戦場とは正反対だ。

いざ戦となればくどい程、神経質なセレス。

あらゆる場所、場面で気を配り、付け入る隙を殆ど見せなかった。ロゼッタが奇襲を仕掛けた理由の一つがそこにある。

「長い商いになるらしい。俺一人じゃ無理だ。」
「どんどん話を進める。」

「長いつて……。どのくらいなの？」

セレスはすんなり会話に戻った。

アドニスの瞳が面白そうに細まる。

「最低2〜3ヶ月って所か。」

断る返事をしよう、とセレスが口を開いた瞬間
「先に湯を貰う。」アドニスは椅子を立ち、奥の扉へ向かった。
先制攻撃。出鼻を挫かれた。

アドニスは湯から上がると居間に入る。

片付いたテーブルでセレスはお茶を飲んでいた。

綺麗な姿勢。赤錆色の髪は、静かな艶を放つ。

音も立てず椅子を引き寄せ、座る。

背もたれに両腕を置き、顔に乗せた。

アドニスの顔は上半分しか見えない。

赤銅色の両眼は考え込んでいる斬鉄姫をじつと見る。
獲物を見る捕食者の眼。

カップを卓に置いた時、セレスはアドニスに気付いた。

「上がったの？」

アドニスは両腕に顎に乗せた。

「今日明日出発じゃねえから、安心しろ。」

「無理だわ。お断りします。」

「寝る。」

さつさと椅子から立ち上がり、寝室へ向かう。

セレスは小さくため息を吐いた。

- - - - -

湯から上がって、居間に戻るとセレスは椅子に座る。
教会の仕事は休めない。食べていく為にも。

そして護衛の仕事だと、剣を持たなくてはならない。

――剣――

持ちたくない自分と、剣に生きた自分がいる。
闘ぎあう、二人の自分。押さえ込んでしまえ。

セレスはテーブルの上の灯りを見つめた。
膝の上の手はタオルを強く握り締めている。

「髪、ちゃんと拭いたか？」

寝室の方から声がした。

セレスが目凝らすとアドニスが扉の横に立っていた。
腕を組み壁にもたれかかり、此方を見ている。

闇に紛れ、気配を感じなかった。

艶やかな黒髪。濡羽色の獣。

黒豹だ。油断したら咽笛を噛み切られる。

「今から拭きます。」

膝の上のタオルを持ち上げようとした。

アドニスは忍び寄り左手でタオルを取り上げようとする。

セレスはタオルをアドニスの手に巻きつけ、縛り上げた。

「大分、勘が戻ってきたじゃねえか。」

手を見ながらアドニスは楽しそうに言う。

「休まないわよ。」

斬鉄姫はアドニスを見上げながら告げた。

「怖いから睨むなよ。」

咽の奥で笑いながら手からタオルを解くアドニス。

「話をそらさないで頂戴。」

頭を拭いてもらいながらセレスは言った。

「旅支度は俺がする。オマエ、金無いだろ。」

「私は休まないと言った筈です。」

「ちゃんと後払いで返せ。」

「だから！！」

タオルを掴むと床に叩きつけながらセレスは椅子から立ち上がった。
緑青の両眼が、殺気立っている。

「どの位取り戻したか、試したくねえのか？」

赤銅色の眼は苛烈な色を帯びる。

二匹の豹は牙を剥き、唸り声をあげた。

其の五 金色（こんじき）

「答える。」

斬鉄姫を見下ろしながらアドニスは訊いた。

テーブルの上にあるランプの灯りは

アドニスの赤銅色の眼に映り、金色の輝きを与える。

それは戦場ではなく、居間で不気味に光った。

「試したい気はある。でも、剣は持ちたくない。」

短い沈黙の後、低い声でセレスは答える。嘘は無い。

「ケツ、それであのザマか。あの時、俺がいなかったらどうなった？」

無機質な声でアドニスは深くセレスを抉る。

「死んでいたわね。」平然と答える斬鉄姫。
解ってるじゃねえか。

獣は牙と爪を失くしたら、死ぬ。

「解放の後がそれか。腐れてるな、てめえは。」

恫喝する声に対して、セレスは低く唸る。

「腐って結構だわ。」

- - - - -

殺戮の中で生きてきた。戦乱の習いとはいえ、多くの命を奪った。

赤錆色の髪を見る度、相手が流した血を突きつけられる思いだった。

「泣ける時に泣いたほうがいいよ、セレス。」

人を殺め、血塗られた自分を受け入れてくれた夫。

これからもそうすであろう自分を支えてくれた夫。

あの人は、もういない。

徹底抗戦すればロゼッタはラッセンの領主を虜囚とし、それを盾に従属を強いる。

あの人はそれを拒む。そして死があの人に覆い被さる。私はそれを見たくなかった。

だから、黒光將軍との勝負を受けた。全力で戦い、確実に死ねる。

結果は――

罰が下り、生き残ってしまった。

私が斬鉄姫であるが故に、奇襲を招き入れた。

私が斬鉄姫だから、血を呼ぶのだ。

私の血も、血を求める。

もう沢山だ。

解放された今の時代に戦乱は無い。

私が剣を持つ必要も無い。

- - - - -

アドニスに威嚇する斬鉄姫。

冷たく光る緑青の眼。敵を見る眼だ。

「持たない」ではなく「持ちたくない」と言った。

最初に訊いた時も、今も。

自分が戦士である自覚だ。

解っていないながらそれを捨てたい一心だな、オマエは。

理由はどうでもいい。

斬鉄姫は戦士だ。

剣を捨てても、生きていける戦士はいる。

だが、てめえは剣を捨てて生きていける程、器用じゃあない。

剣を捨てたら、生きていけない。
生きたいから、鍛錬を始めたんだろうが。

「剣を持たずに後悔するより、剣を手にして後悔したほうが、ずっといい。」

黒豹の唸り声は黒い刃となり、斬鉄姫を容赦なく斬り刻んだ。

選べ。

今を生きる気が無いなら、俺がその首を刎ねてやる。

セレスの白い肌を染める金色の光が瞬く。

「寝るわ。」

雪豹はしなやかにアドニスの横を通り抜けた。

アドニスはタオルを拾い、椅子の背もたれに掛けた。
ランプの灯りを絞りながら口許に笑みを刷く。
黒豹は闇と同化した。

- - - - -

アドニスは寝台に上がる。

セレスはいつもの体勢で横になっている。

アドニスはセレスの腰を抱き、背中に擦り寄る。

「手にマメを作って、潰すだけの時間はあるの？」

何事も無かったかのような口調で、セレスの背が訊いて来た。
すこし笑いを含んだ声でアドニスは答える。

「十分あるぜ。あのなまくらを置いていく。」

「助かるわ。」

岩場から、雪豹は一步降りてきた。

「明け方出て行く。メシはいらねえ。」

「・・・助かるわ。」

セレスの返事を聞くとアドニスは寝息を立て始めた。

其の六 藤脂色（えんじいろ）

「姉さん、どういう事？仕事を休むって。」

教会の書庫で本棚に本を納めながらフィレスは姉に訊いた。

姉より先に解放された妹は、教会に間借りしていた。

教会に住む僧侶の賄いや尼僧の世話をしている。

書庫の整理は妹が持ちかけてきた仕事だ。

休み以外は必ずと言っていいほど顔を会わすから、特別な行き来は無い。

「ちよつとした用があるの。しばらく留守にするから。」

紙片に書かれた本を出しながらセレスは答える。

フィレスは姉の様子を窺う。

「いつから？」

「まだ、はつきりとは判らないわね。」

「まあ、いいけどね。それじゃ、教会の仕事はアタシが代わりにしといたげる。」

「助かるわ。」姉は笑った。

- - - - -

昨日の夜、アドニスはやつて来た。

大きな目の黒い荷物と共に。

「逃げるなよ。」

アドニスは言葉の代わりに荷物を置いた。

「湯、貰うぞ。」

一言セレスに向かって言うと、さっさと浴室の扉へ消えていった。セレスは暫くの間、荷物から視線を外せずにいた。

ゆっくりとソファアの横に隠れるように立てかけてある剣を見る。

アドニスが置いていった剣。

「剣を持たずに後悔するより、剣を手にして後悔したほうが、ずっといい。」

気配を感じてセレスは奥を見た。

アドニスは頭を拭きながら扉を閉めている。

セレスは感覚が鋭利になっていた。雪豹が小さな物音で耳を動かすように。

アドニスの口許がタオルの下で小さく歪んだ。

ソファーに座ると「頭、拭いてくれ。」

タオルをセレスに渡し、頭を垂れる。

「自分でしなさいよ。」

「嫌だね。」

小さなため息を吐くとセレスは濡羽色の頭を拭き始めた。

「あれは、明日開ける。オマエ、早目に帰ってこい。」

「いつ、出るの？」護衛の仕事に、と言外に訊く。

「それも明日だ。」

「貴方、荷物も黒いのね。」

「ほっとけ。」

タオルの下で可笑しそうな声がした。

「もう、いいでしょう？」

セレスがタオルを離れた瞬間、アドニスはセレスの両手首を掴んだ。ゆっくりソファーから立ち上がり、掌を返す。

タオルが二人の足元に落ちた。

「マメ、潰したな。」

セレスは自分の掌に視線を落とす。

真皮が剥き出しになり、潰した部分は臙脂色になっていた。

「後は、固めるだけだから。」

「身体は？」

「貴方程じゃないけど、ある程度は作った。」

アドニスを見てセレスは言う。

何も着ていない鋼のような上半身に水滴が付着していた。

「上等だ。」

タオルを拾い、椅子に掛けながらセレスはアドニスに言葉を投げる。

「アドニス、頭がボサボサね。寝癖が付くわよ。」

「・・・ほっとけ。」

セレスの後姿が寝室の扉に消えた。

アドニスは濡羽色の髪を撫で付けながらソファに座った。

いちいち普通の女と反応が違う。

しかも戦士としてしかアドニスを見ていない。

だが、それこそ、アドニスが求めていた斬鉄姫だ。

普通の女は、何処にでもいる。

アドニスは、普通の女など欲していない。

アドニスも寝室へ入った。

セレスはもう寝息を立てている。

野性のしなやかさで寝台に上がると

腰を抱き、背中に擦り寄る。

二つの規則正しい寝息が闇に吸い込まれた。

- - - - -

「ちょっと用があるから、今日は早目に帰るわ。」

本を抱えフィレスに言う。セレスは扉に向かった。

「はい。」妹の明るい返事が姉に戻る。

フィレスの勘は冴え渡る。

何か、あるわね。

閉まった書庫の扉を見ながらフィレスの目はキラリと光った。

解放以降、出不精だった姉さんが家を空けるなんて、一大事だわ！
気になる！すごい気になるのよ！！姉さん！！！！

うきうきするフィレスが書庫にいた。

其の七 黒紅（くろべに）

いつもより早い夕刻、セレスが家に帰るとアドニスは何物を解いていた。

ソファアの前で胡坐をかき、荷を広げている。

覗き込むと旅支度が一通り揃っていた。

「後払いだ、忘れるな。」濡羽色の頭が言う。

「解ってるわよ。」セレスの返事にアドニスは顔を上げた。
ソファアに身をよじり「ちよつと、これ着てみる。」

黒紅の衣類をセレスに向かって差し出す。

「貴方と同じ色なんだけど。」

「目印に丁度いいだろうが。」

「・・・確かにそうね。」

衣類を手にしたセレスは目を瞠った。

「これ、かなり良い物じゃないの？」

生地は厚めだが、重さを感じさせない。織りも詰まっている。
既製品ではない筈だ。

その証拠に左の胸に同色で細かい刺繍が施してある。
裏を見ると薄くなめした革を刺繍が縫い付けていた。
装飾と実用性を兼ね、申し分ない出来。

「良い物を長く使った方が経済的だ。」

下を向き、荷を確認しながらアドニスは続ける。

「動きを確認しなくちゃなんねえだろ。早く着て、こっちに来い。」
「それもそうだね。」セレスは寝室に向かった。

寝室で簡素な普段着を脱ぎ、黒紅の上衣に袖を通す。
両方の袖と肘の部分にも刺繍がある。

王族として、高価な物は当然の様に身に着けていた。

今の自分は王族ではない。身分相応では無いものを着て、いいのだろうか。

複雑な心境で下衣を穿いた。

臀部と腹周りの部分、それに膝に刺繍がある。

腰紐を結んでいたら「まだか？」

扉の向こうから声がする。

「今、行く。」セレスは寝室の扉を閉めた。

- - - - -

現れた斬鉄姫。アドニスは口許で小さく笑う。

「寸法、どうだ？」

アドニスは長靴を持ちながらテーブルの横に立つセレスに近づいた。

「ちょうどいい。・・・何故、私の寸法が分かるの？」

黒い長靴を床に置き、服の下でセレスの髪を解放しながらアドニスは言う。

「んなもん、見りゃ分かる。」

呆れ顔のセレスの髪がふわり、と肩で舞った。

「長靴を履いたら、こっちに来い。」

アドニスはソファーの前で胡坐をかいた。

セレスは椅子に腰掛け、長靴を履き始めた。

二人が立てる物音だけが居間を流れる。

一通りの身支度を終え、セレスはアドニスの前に立つ。

「一応、着たけど。」

アドニスはセレスを見上げた。

黒紅を身を覆い、赤錆色の髪が肩に落ちている。

二つの色は鮮やかにセレスを彩る。

自ら装う、というセレスをアドニスは見た事が無かった。

そういう考えが無いのだろう。

身だしなみはきちんとしている。だがそこから先が無い。
要するに「女らしい」部分が薄いのだ。

普段着も、とてもセンスが有るとは言えない。

中年の婦人の地味な着衣。その寸を詰めて着ている。

アドニスはそれでいいと思っている。

だが、旅の間くらいは俺の目を楽しませろ。

「馴染んでるぞ。」褒め言葉に聞こえない褒め言葉を口にした。

「貴方、仕立屋で採寸の仕事をした方がいいんじゃないの？」

アドニスは答えず、帯剣用のベルトを取り出した。

「剣はどうする？」

黒いベルトをセレスの腰に廻しながら訊いた。

「なまくらを使うわ。」

「あれでいいのか？」

「材質はともかく、貴方の手入れが良かったし。手にも慣れてるから、あれがいい。」

きゅっ、とベルトをアドニスは締めた。

「動いてみる。」

セレスはソファアの横の剣を取り、黒いベルトに装着した。

以前の白銀の鎧ではない。場所は戦場でもない。

だが、斬鉄姫がいた。斬鉄姫は居間の中央に立つ。

電光石火の速さで剣を抜いた。

- - - - -

剣を構え、型をとる。二つの色が居間に舞う。

狭い場所で、狭い場所なりに動く。

上段、下段、かさがけ、突き。自分とは違う、綺麗な正統の剣技。
アドニスは斬鉄姫を眺めていた。ブランクが確かにある。

俺なら確実に殺れるぜ、斬鉄姫。

立ち上がり、荷物の中から銅貨を取り出すとぴん、と斬鉄姫に向けて弾いた。

素早い反応で赤銅色を真つ二つに斬る。

アドニス of 真正面で剣を構える黒衣の斬鉄姫。

細めた緑青の両眼が、冷たく光っている。

ゾクゾクするな、オマエ。

「服はどうだ？」問われてセレスは静かに剣を収めた。ベルトからそつと外し、ソファアの横に立て掛ける。

「申し分ないわね。動きやすいし。・・・採寸師の方が向いているわよ。」

「向かねえな。」面倒くさそうな返事。

「ベルトはどうだ？オマエ、腹出てたぞ。」

「・・・言っている事と悪い事があるわよ。」

流石のオマエも、これに関しては「女」だな。

「もう二つ程、ベルト穴が欲しい。」

「見栄を張るな。」小馬鹿にした口調と顔でアドニスが言う。

「張ってないわよ！」声を荒げるセレス。

「じゃあ、空けとく。使う機会があるとは思えんが。」

咽の奥で笑いながらアドニスはベルトに手を掛ける。

その瞬間、

「姉さん、今日晩御飯一緒に食べよう！」

勢いよく玄関の扉が開き、食材を抱えたフィレスが入ってきた。

「あら、フィレス。いらつしゃい。」

普通の返事。だが、姉の状況は普通ではなかった。

黒衣の男が居る。その男は姉の腰に手を廻している。

誰？てゆうか、この、いい雰囲気は、一体、何なの？？

一瞬の驚きが去った後、フィレスは様子を観察する。

強面だけど、いい男だわ。姉さんいつの間にちゃっかり男を見つけたの？

床の荷物は何？帯刀用のベルトね。剣を持つ気になったんだ。姉さん、綺麗。似合ってる。

頭の中を色々な思いが忙しく駆け巡る。

「妹か。」聞き覚えのある声がした。

「ア、アドニス?!」

嘘でしょー！心の中で叫ぶ妹。

「そうなの。吃驚したでしょ。」

相変わらずの鷹揚さで姉は言う。

「流石、姉妹だな。反応がおんなじだ。」

何事も無かったかの様にベルトを解くアドニス。

「姉さん、付き合ってるの？」つかさず探りを入れるフィレス。

「何故そうなるのか、解らないわよ。」セレスが言う。

「だ、そうだ。」ベルトを荷に納めながらアドニスが続ける。

何なの、この二人。いい雰囲気醸し出しておきながら。

- - - - -

フィレスの観察は止まらない。姉の格好は旅支度だ。

何はともあれ、アドニスは外の世界に姉を連れ出してくれる。

「色々訊くわよ、姉さん。夕食の支度はアタシがするね。」

順応性の高い妹は食材を抱えて台所へ向かう。

「仕事の話もその時する。」アドニスが言った。

「漬したマメを保護する手袋は、あるの？」

「用意した。嵌めてみる。」

興味津々で聞き耳を立てていたフィレスが明るい声を出す。

「大目に材料用意して良かったー。姉さんの好きな果物もあるよー。」

「ファイレスの声を聞きながらセレスは微笑む。

「出来た妹なの。」嬉しそうな、少し自慢そうな声と表情。そして、その表情が考え込む。

「後払いで、全部払えるかしら・・・。」

嵌めた手袋を眺めながらセレスが呟いた。

「報酬を見越して支度した。残りやいい方だ。」

「ちよつと待つてよ。要はタダ働きしろって事？」

市井の言葉が板に付いていらっしやるぜ、斬鉄姫。

「出来高が付くからな。期待してるぜ。」

やっぱり断るべきだったわ！いえ、今からでも遅くないかもと、セレスが口を開いた瞬間

「姉さん、大皿どこー??」ファイレスの声が台所から響く。

じゃれ合うのも結構だけど、アタシはお腹が空いたのよ。

ゴメンネ、姉さん。

見事なまでの連携にセレスは言葉を失った。

其の八 薄群青（うすぐんじょう）

出発の日、フィレスはセレスの家の前にいた。
まだ空は暗い。

大切な姉が、外の世界に旅立つ。
嬉しい気持ちと一抹の寂しさ。

「あら、来てくれたの？」

姉は居間で黒紅の服を持っていた。

「アドニスは？」

「奥で支度してるわ。」

妹は姉の前に立ち、王族の礼を執る。

「支度させていただきました。姉上。」

妹が何故、このような礼を執るのか姉は問わない。

「よろしく願います。」

妹に着衣を差し出し、姉は受けた。

衣擦れの音と共に時間が静かに流れる。

姉の身体は以前の様に締まっている。

戦に出るのではない。

だが、姉は戦士だ。

戦いに生きた。剣に生きた。

不器用な姉。黙って全てを引き受けた姉。

だから自分は自由に生きてこれた。

「射なさい！」

姉の言葉に矢を放った。

一瞬の躊躇が邪魔をし、殺せなかった。
二年間、姉は苦しんだ。

そして解放されてからも、姉は苦しんでいた。
「フィレスが居てくれて、助かるわ。」
お見通しの姉。

アタシがつらいの、ちゃんと知ってた。

- - - - -

「器用じゃねえからな。」

黒い刃は解っている。

黒い刃の様な剣の使い方を知らない、姉。
だから護衛の仕事を止めなかった。

剣。以前とは違う使い方がちゃんとあるのだ。
それを知れば、姉は生きていける。

外の世界を知って欲しかった。

今の時代に戦乱は無い。

解放されたのだ。荷を背負う必要は無い。

もう、自分の為に生きてもいいでしょう。姉さん。

一筋の涙が妹の頬に流れる。

姉はそつと妹の涙を拭った。

旅に出たら、姉は自分だけの姉ではなくなる。

黒い刃が姉を捕らえる。

姉が姉のままで受け入れる。

義兄以外に、そんな豪気な存在が居るとは到底思えなかった。
だが、居たのだ。

かつて姉に首を刎ねられた、黒刃のアドニス。
姉はまだ気付いていない。

鈍いにも程があるわよ、姉さん。

しかも厄介な相手に目を付けられたわね。

- - - - -

「できました。姉上。」

「ありがとう。」

白銀ではなく黒衣の姉。

白い肌に緑青の瞳。凜とした美しさ。自慢の姉。

赤錆色の髪は横で一本の三つ編みにして、黒衣に隠した。

唯一、姉が出来る髪の結い方。

切ると言い張ったが、嘘泣きで止めさせた。

こうやって、結って服の中に入れば、邪魔にならないでしょ？

「姉さん、おまじないしていい？」

姉を戦場に送り出す時、いつもしたおまじない。

姉は笑った。綺麗な笑顔。今は自分だけの笑顔。

「いいわよ。」

妹は姉の顔に手を伸ばす。

姉は妹の顔に手を伸ばす。

お互いの鼻を人差し指でちょんちょんと撫でる。

「ちゃんと帰ってきてね。」

「ちゃんと帰ってきます。」

戦乙女、感謝します。姉を解放してくれて。

やっと私達、今の人生を生きられます。

「なんだ、そりゃ。」

居間に入ってきたアドニスが馬鹿にした声を出す。

黒衣の男。姉と同じ仕立ての服を着ている。

意外にアンタ、伊達男だわよね。

しかも、ちゃっかり姉さんを自分好みに装わせてさ。

「アンタには関係ないわよ。」

「そうそう、関係ないわ。」

「流石、姉妹だな・・・。」

- - - - -

「行くぞ。」アドニスが言った。

「行ってくるわね、フィレス。」

明け方前の出発。

黒衣の二人が荷物を持ち、明るくなり始めた空の下に立つ。

「おみやげ、よろしくね。姉さん。」

「え？」

「出来高払いに期待してるわよ。」

「が、頑張ってみるわ。」

「その強面も」

強面の眼はフィレスを見る。

「しっかりおみやげ代、稼ぎなさいよ。」

「いつてらっしゃーい！」

フィレスの明るい声が薄群青の空に響いた。

千紫万紅・前編 終

其の八 薄群青（うすぐんじょう）（後書き）

千紫万紅・中編へ続く

其の九 焦茶（こげちゃ）

ゾルデの郊外で商人と落ち合う、という段取りになっている。二人が約束の場所に着くと商人は既に待っていた。

「よろしく頼みますよ。」

小太りの、人の良さそうな中年の男性は言った。

「こちらこそ、お願いします。」

セレスは頭を下げた。アドニスは左手を上げると荷台に向かう。ひひん、と焦茶の馬が嘶いた。

幌を持ち上げ、荷物の底から黒い大剣を引っ張り出す。

鞘は金属ではなく、なめした黒革を幾重も重ねたものだった。

アドニスは黒い刃を鞘から出すと、無言で背中に負った。

「鍛冶屋がばやいとつたぞ、お前さん。」

「うるさく注文したからな。」

やれやれ、といった表情で商人はセレスに向き直った。

「ところでお嬢さん。」

「あ、あの私、もうそんな歳では・・・」

「でも、独身と見た。だからお嬢さんだ。」

からからと笑う商人。「長旅になるから確認しておきたいんだが。」

「2〜3ヶ月という事で彼と契約してるんだが、多少長引いても構わんかね？」

「大丈夫です。」セレスは答える。

「細々とした打ち合わせは、彼と済ませてあるからの。改めて頼んだよ。」

「出るか？」

「そうするかね。」

- - - - -

雲ひとつ無い晴れ渡った空の下、馬を引き道に行く。
刻々と変化する風景を生前は楽しむ余裕などあまり無かった。
緑青の双眸に映る色彩。世界は色で満ちている。
ゾルデから出なければ、知らなかったであろう色だ。
「お嬢さんは、旅は初めてかい？」商人が聞いてくる。
「初めてです。」嘘では無い。解放後は初めてだ。
「いい経験になるよ。まあ、楽しいばかりじゃないがの。」
「そうですね。」多くの色は危険色も含まれる。
商人は必要以上に詮索しない。
それが身上でもあるのだ。

- - - - -

初めての夜は野営だった。

焚き火を囲み、三人は食事を取り終えて会話を始めた。

「今日、俺が夜番をする。」

「夜番が要るかの？」

「した方がいいと思います。」

「おや？といった表情をする商人。」

「さつき、獣の死体があった。血の匂いに引き寄せられる可能性」

セレスは言葉を途中で切った。

アドニスは顎で商人に指図する。商人は火と荷の間にゆっくり移動する。

異形のモノが前方の離れた場所に現れた。

セレスは片膝を付き、剣の柄に手を添える。

アドニスはゆっくり立ち上がり、大剣を構えた。

ひとつ、ふたつ。気配は二つだ。

緊張が辺りの空気を支配する。

異形のモノと二人の距離が徐々に縮まる。相手は明かりを目指している。

二人は状況を見つつ、自分たちの間合いまで待つ。離れた場所に繋いである馬が気付いて嘶く前に、一撃必殺で仕留める。

アドニスと赤銅色が見て合図をする。

―オマエは右を殺れ―

セレスはゆっくり緑青を睨み、そして開く。

―承知―

生き残る為の戦い。

ぱちんと火がはぜ、それを合図に二人は動いた。ラッセンの時の様に。

セレスは立ち上がると同時に右に走り出す。

異形のモノが自分に気付く前に、殺る。

電光石火で剣を抜くと、水平に刃を寝かせ胴を払う。だが真つ二つにならなかった。

この扱い方では駄目だ。

剣に慣れる為にマメを作り、扱えるつもりでいた斬鉄姫に実戦は違う答えを突きつける。

セレスが眉を顰める。傷を負わされた異形のモノは怒り、咆哮を上げようとす。

仲間を呼び寄せさせると後が厄介だ。

これは雇用主が自分を試す試験でもある。

守ってもらえなければ用は無い。護衛とはそういうものだ。瞬時に剣を構え直し、相手の喉元から斜め下に斬り払った。深く、鋭く、鮮やかに。

アドニスは斬鉄姫を見ていた。

左の相手を瞬殺した後、セレスの様子を眺める。

使えなければ置いていく。

伊達や酔狂で引つ張り出した訳じゃねえぜ。

戦士として認めているから相棒に選んだ。

応える。オマエはそれだけの価値がある女だ。

戦いを眺めるアドニスは冷静な戦士の目で状況判断をする。

なまくらであそこまで斬るか。しかもすぐ建て直して、力加減を変えてきやがる。

にやり、と口許が歪む。

怖えな、オマエは。

だが、もう一つ残っている。

それに必ず応える。

- - - - -

離れた場所に居るセレスは戻ってこない。

商人は心配そうセレスを見る。

先程からセレスは立ち尽したまま動かないのだ。

アドニスは声を掛けようとする商人を手で制し、両手を腰に手を当てセレスに歩み寄る。

一箇所を凝視し荒々しく上下するセレスの肩に背後から顎を乗せた。分断され、液体に浸った異形のモノにもう一対の視線が刺さる。

「ゾクゾクしただろ？」止まらない液体を見ながらアドニスは言った。

セレスの肩が一瞬止まった。それを合図に序々に呼吸が収まってく。

「ここまで悪臭を放つと、今日は夜番は要らないわね。」

「殺られる前に、殺る。そう思ったか？」

苛烈な問いは続く。セレスが捨てたがっていたものを突きつける。

セレスは何も言わず見事な所作で剣を収めた。

物騒な答えだな斬鉄姫、と言わんばかりにアドニスが眉を吊り上げ

た。

「寝るわ。」肩をずらし、焚き火に戻ろうとした。

「オッサンが心配してるぜ。」

「御免なさい。ちゃんと御主人にも謝るわ。」

寄り添い、此方に向かってくる二人を見て商人は安堵した。

お前さんが心配無いと言ったが、その通りだったよ。

おまけに仲が良さそうだから、此方としてもやり易い。

的を射ているのか、外しているのか。

それは誰にも解らない。

焦茶の馬がぶるるん、と返事をした。

其の十 桜鼠（さくらねず）

旅は続く。

商人は先々で頼まれた物を渡し、代価を得る。

そして売れそうな物、頼まれていた物を仕入れる。

剣や鎧の類はアドニスに意見を求めている。

人との関わりをあまり好まない（とセレスには見える）

アドニスが商人の問いに短く答えている。

したたかに、今を生きているのだ。

そもそも周りと己を見極める事が出来なければ、傭兵として成り立たない。

「お嬢さん、これどう思う？」

衣類をセレスに見せた。桜色に薄い鼠色が溶けている。

桜鼠の綺麗な色。珍しい一品だ。

「綺麗な色だわ。この染めだけでも価値があるわね。」

「そうかい。じゃ、仕入れてみるかの。」

元王族の鑑定眼は正確に答えを出す。良い物を見て育っているからだ。

商人は自分の目で確認し、他者の声を聞く。

そして自らの判断で仕入れるか否かを決める。

いくら良いものでも売れなければ意味が無いのである。

- - - - -

セレスも大分旅に慣れてきた。

今は山間の麓にある小さな村にいる。

久しぶりに宿屋に泊まる事になった。

「申し訳ないね、お嬢さん。」

最初の宿泊先で商人は、本当にすまなそうにした。護衛の一人が女性とは思わずに、既に二人部屋を手配してしまったのだ。

「いえ、気にしないで下さい。」

「無駄金を使わなくて済む。」

「そう言ってくれると、助かるよ。」

アドニスとセレスは二人部屋に入り、別々の寝台で眠った。二つあるのだから、無理して一つの寝台で眠る必要は無い。

今回も二人部屋だ。背中合わせに二人は床に座り、剣の手入れをしている。

そろそろ限界かもしれない、とセレスは思った。

気を付けて使ってきたけど、元がそんなにいい剣ではないから。

片手で剣を持ち真っ直ぐ伸ばす。

もう少し大きい街に寄る事があつたら、剣を替えなくては。それまで持つか？

手入れを終え、刃の確認をしているとアドニスが立った。

セレスは剣を鞘に収め、道具をまとめると壁際に向かった。

アドニスが後ずさりする。足音を立てない。

セレスは壁にもたれ掛かり、唇に指を当て、戦士を観察する。

黒い大剣を構える。いつも手入れが終わったらアドニスはそうする。

天井ぎりぎりまで振り上げ、ゆっくり振り下ろす。

あれだけの剣を扱える、上体。

重みに邪魔される事無く体重移動する、下半身。

自分とは違う。自分は速さと一瞬の力加減で斬り抜くしかない。

セレスの視線を感じてアドニスは振り返る。

緑青の両眼を細め自分と相手を推し量っている戦士がいた。

アドニスは声を掛けた。「持ってみるか？」

「え？」セレスは小さく驚く。

そして「いいの？」と問いかけた。

「いいぜ。」黒刃の男はちよいちよいと手招きする。

嬉しさを隠してセレスはアドニスの横に立った。

「失礼します。」セレスは礼を執り、戦士と剣に対する敬意を表す。

アドニスは片方の眉を吊り上げると黙って剣の柄を渡す。

刃は床についたままだ。

セレスは足を開いて、剣の柄を両手で握る。

緊張と集中が斬鉄姫を支配する。ゆっくり刃を持ち上げた。そして構える。

腕が、身体が震える。半端な重さではない。

構えるだけでもたいしたもんだ、と横から眺めながらアドニスが思った瞬間。

「！」セレスが目を睜り、食い入る様に大剣を凝視する。

気付いたか？まあ、そうだろうな。

「支えてやる。振り下ろしてみろ。」

アドニスはセレスの後ろに立ち、セレスの腰と両手を支えた。

支えられたセレスはゆっくり剣を持ち上げ、ゆっくり振り下ろした。刃を床に置いた。

- - - - -

「呆れた・・・」床に視線を落としセレスは言った。

アドニスの剣技は基本のみが正式なもので、残りは我流だ。

この度、剣をあつらえた。

という事は自分が扱いやすいように剣の重心や、刃の厚さを部分部分で微妙に変えている。

要するに普通に打った大剣ではないのだ。

特にセレスの様な正統派の剣技を操る者が持てば、普通の剣との差は歴然である。

そして一流の戦士なら、癖を見抜ける。

だから自分の剣を刀鍛冶に打たせる戦士は、他者に剣を預けない。

昨日の友は今日の敵になる戦乱の世では命取りになるからだ。

セレスは「いいの？」と訊いた。

自身も戦士だから、事の次第は承知している。

「持った感想がそれか。」面白そうにアドニスが言う。

「呆れるわよ、普通。貴方も貴方だけど……。」

視線をアドニスから黒い刃に移し、大剣を眺めながらセレスは呟いた。

柄をアドニスに還す。

「そりやそうだ。」片手で大剣を持ち上げるとアドニスは鞘が置いてあるソファアに向かう。

「湯を貰ってくるわ。明日は早いんでしょ？」

ひらひらと手を振ってセレスを送り出す。

自分の剣を持たせる、と言ったら嬉しそうな顔をした。

アドニスなりの気遣いだ。共に戦う者への、そして一つの結果に対する。

山道を通る旅だ。山賊が襲ってくる。

今迄は、不死者や異形のモノ相手だった。

次は人間だ。人間を斬鉄姫は斬る。そして斬った後、一人でもがき、苦しむ。

自分が出した答えを自分で受け止める為に。

どういう変化が起こり、受け止める為にはどの位の時が必要になるか。

アドニスはセレスでないから判らない。

万が一、出来なければ置いて行く。

烈なる性。敵を味方までも畏怖させる、黒刃のアドニス。肉食獣は死んだ獲物には興味が無い。

役に立たない護衛は要らない。普通の女も要らない。

ここまで来て腐れた事をしやがる奴は、勝手に死ね。

俺が手を掛ける必要も無い。

- - - - -

セレスは浴室で黒紅を脱ぎ髪を解いた。そして静かに湯に沈んだ。
明日から山道だ。

山道は山賊が出没する。おそらく相手は複数出てくる。

アドニスが剣を持たせたのは乱戦を想定しての事だ。

敵味方が入り乱れる戦い。共に戦う者が自分の癖を把握していた方がやりやすい。

自分達の剣技は正反対だ。正統派である自分がアドニスに合わせる方が手っ取り早い。

山賊。人間。肌が小さく粟立つ。

湯から上げた自分の腕を見たセレスの脳裏に、昼間見た衣類の色が浮かぶ。

桜鼠。珍しい染め。湯に入っているながら、寒気をセレスは感じていた。

其の十一 深緑（ふかみどり）

深緑の中を商人一行は進んでいた。

他愛の無い話をする商人とセレス。問われたら返事をするアドニス。山の中を穏やかな時と共に一行が進む。

何事も無ければいい、とセレスが思った時だった。

「最近、ここいらにでるらしいぞ。」商人が言った。

「移動したのか？」アドニスは訊く。

「らしいの。仲間が何人が殺られたと聞いた。」

「ご苦労なことだ。」

賊の事だ、とセレスは思った。

特定の生き物以外は遠くに移動などしない。自分の領域の中で過す。

「商人の仲間」が「殺られた」

商人を求めて移動しているのだ。人間しかない。

今迄対峙してきたモノと違う存在。

自分の大剣を持たせたアドニス。

「ちゃんと帰ってきてね。」そう言った妹。

出来るだろうか。

風が緑を揺らし、ざわめきと共に異質な音を運んで来た。

アドニスがセレスに目配せする。

セレスがゆっくり瞬きをした。

「オッサン、いい天気だなあ。」商人に合図する。

「そうなのう。」答える商人。相手に気取られないように、荷の方に移動する。

ざわざわと緑が揺れる。その時が近い。

セレスの背中に鳥肌が立つ。

- - - - -

矢が焦茶の馬の鼻先を掠め、馬が激しく嘶いた。

それを合図に複数の物音が一行目掛けて襲い掛かる。

「殺れ！」盗賊が叫ぶ。

アドニスが大剣と共に宙を舞い、宙で一人を倒す

着地と同時に横に剣を薙ぎ払いもう一人を斬った。容赦なく次の獲物に襲い掛かる。

断末魔の声の中を黒い死の影は休む事無く舞い続けていた。

セレスは剣を抜き、向かってくる山賊を一撃で倒せなかった。

何度も剣を交えている。手間取っている自分がそこにいた。

迷っている証拠だ。そして迷いは死に繋がる。

「んだあ、女かよ！」剣を交えている相手が声を発した。

「とっつかまえて、売っぱらおうぜ！」遠くから声が響く。

自分の目の前の男が卑しい笑いをセレスに向ける。

「いい女だ。慰みモノにすりゃあ、いいぜ！」

にやにやと笑いながら上段から剣を振り下ろす。

受けるだけで流せない斬鉄姫。手間取る自分を感じていた。

その間にもアドニスは確実に死を与え続けている。

複数の山賊に取り囲まれている黒刃のアドニスは口許を歪めながら

笑う。

楽しくて仕方ないといった風に。

逃げ出そうとする一人の山賊に苛烈な刃が襲い掛かった。

逃げる機会を失った山賊達は、次々と黒刃の餌食と化した。

「けけっ、弱っちいくせによお。」

罅迫り合いの中、臭い息と共に卑下する言葉を吐きかける盗賊。

ざわり、とセレスの血が波立つ。
その時だった。

- - - - -

「止めてくれ！」商人の声が深緑をつんざいた。
全身の楔が放たれ、自分の血が沸騰するのを感じた。

緑青の双眸は細まり冷たい光を放ち始めた。

セレスは素早く相手の剣を向こうに押しやり、距離を取る。

おや、といった表情を盗賊が浮かべた瞬間、黒衣が電光石火で駆け抜けた。

斬鉄姫の頬に赤錆色が小さな染みを作る。

崩れる人影を見向きもせず、商人の方に駆け寄る。

荷をとられまいとする商人に対し、盗賊が剣を振り下ろそうとしている。

その背後で矢をつがえる仲間。

一生懸命働いて稼いでいる人間の代価を奪う資格は、貴様等には無い！

冷たく光る緑青の眼で瞬時に位置を測り、剣が商人を喰らう寸前でセレスの剣が盗賊の剣を絡め取り、鏑を引っ掛けた。
盗賊の手から剣を奪うと、そのまま矢を放とうとする方向に投げつける。

矢が放たれる寸前に盗賊の剣は仲間突き刺さった。

「ぎゃああー！！」断末魔の叫び。

二人。

剣を奪われて呆然とする盗賊に斬鉄姫は唸る。

「寝言は寝てから言いなさいよ。」

「なんだあ、このアマ！」

素手で襲い掛かる盗賊の耳を雪豹の咆哮が切り刻む。

「寝言は寝てから言えといった!!」

斬鉄の時。盗賊は崩れ落ちた。

沸騰している自分の血を感じながら、冷静に数を数える。

三人。

無言で剣を構えなおすと、次の対象者に斬鉄姫は襲い掛かった。

- - - - -

手間取るであろう事は解っていた。

此处まで来て迷ってやがる。

手助けする気は初めから毛頭無かった。

迷いは死に繋がる。迷って死ぬならそれまでだ。

相手は二桁いる。何より護衛しなければならない。

思ったよりセレスが手間取ったせいで商人の護衛へ向かうのが遅れた。

チツと小さく舌打ちしたその時、鮮やかな剣技が視界に飛び込む。

来やがった、と思った瞬間自分の口が吊り上る。

ラッセンの時の様に鳥肌が立ち、背中がゾクゾクする。

斬鉄姫の声。戦場で味方を鼓舞し、敵を大喝した声が空を切り裂く。なまくらをなまくらと感じさせない剣技。

自分の大剣の間を縫うように駆け抜け、仕留める。

今は賊を殺る事だけ考えろ、と言わんばかりにアドニスが下段から鋭く黒刃を振り上げる。

振り上がった黒刃の下を赤錆色の髪が鋭く通り抜けた。

- - - - -

二匹の豹は敵を屠る。

鳥肌を立て、冷たい汗を掻いている商人の頭を一つの言葉が掠める。

「心配無い。腕は確かだ。」

・・・確かすぎるぞ、お前さん。

襲撃が終焉に向かうのを感じて、商人は深緑の木々を仰いだ。

其の十二 赤錆色（あかさびいろ）

全てが終わり、辺り一面は赤錆色に染まっている。空気は鉄の匂いを含んでいた。

二匹の豹の苛烈さを物語る様に、動かない賊が地面に寝転がっている。

襲い掛かる者は全て斬った。

自分達に手を出すとどうなるか、思い知らせておかなければならない。

中途半端な撃退は次の襲撃を呼ぶ。だから徹底的に叩き潰す。戦と同じだ。

「オッサン、大丈夫か？」

「わしは大丈夫だ。荷も無事だったしの。」

荷馬車の側で二人が会話する。

「お嬢さんは？」

商人の問いに顎で指し示すアドニス。

離れた場所に立っている、黒衣の人影。

あそこまでの使い手とは思っていなかった。

素人目だが、お前さんは相当だ。だがお嬢さんも凄いな。

セレスを見ながらぼんやりと商人は思った。

- - - - -

抜き身を剣を握ったまま、セレスが二人へ歩を進める。

「ご無事でした？」小さく笑って問いかけるセレス。

「お陰さんでね。ありがとう。」商人が礼を言った。

「おい、オマエ」アドニスはセレスの頬に付着した小さな染みに気付いた。

返り血。以前の斬鉄姫なら、この程度で返り血など寄せ付けない。迷った証拠だ。

アドニスが拭おうと伸ばした手をセレスは押し止めた。

無言で自身の手で拭った。

戦士は、自分の始末は自分でつける。

答えを出した斬鉄姫がそこにいた。

「剣、駄目になったわ。」

「え？何ともないじゃないか。」

商人の問いにセレスが剣を持ち上げた瞬間、剣は二つに折れた。赤錆色の刃が地面にぽとりと落ちた。

「持たなかったか。」アドニスが言った。

「気をつけてはいたんだけどね。」セレスが答えた。

地面で寝そべる刃を見ながら黒衣の二人は言葉を交わす。

商人は寒気を感じた。

「この場を離れるのが先決だな。」剣を背負うアドニス。

「そりゃそうだ。」轡を取る商人。

「荷は無事だから、すぐ出れるわ。」折れた剣先を拾うセレス。一行は会話の後、返り討ちの後が生々しく残る場所を後にした。

- - - - -

二時間ほど道を進めると、商人が言った。

「休憩せんかね？わしはちょっと落ち着きたい。」

「ここいらなら、いいか。」

小さな川が離れた場所にある。

馬にも水を飲ませたいし、自分たちの水筒も満たさなくてはならない。

休憩の準備をしている中、突然セレスが立ち上がった。

「吐いてくる。」

セレスはそう言うと、水筒を掴み一人で一行から離れていった。

「大丈夫かの？」心配そうにアドニスに訊いた。

「訳ありだ。」余計な事は詮索するな、と言外に言う。

「そうか。」それ以上は商人は言わない。

護衛として申し分ない。お前さんとも、こんなに上手くやっている。物を見る鑑定眼も確かだ。何よりこないいいお嬢さんだ。

次も頼めるものなら、頼みたい。

一石二鳥ではないが、こないいい出会いは長い人生滅多に無い。

わしは大切にしたいんだよ。

- - - - -

離れた場所で、セレスは吐いた。

「げえ・・・」

嘔吐する声が聞こえる。

目の前には自分が吐き出した吐瀉物が緑を汚していた。

血の匂いがまだ纏わり付いている。

視界の端に結った自分の髪が見えた。

赤錆色。血の色。吐き気がこみ上げる。

自分の血が沸騰していた。

私の血も、血を求める。

吐く。

手に、肉を斬り骨を断った感触が残っている。

「うげえ・・・」

酸えた味が口の中に広がる。胃液の味。

胃液と共に涙が出た。哀しいの？嬉しいの？

何故、涙が出るの？

涙と嘔吐が止まらない。

- - - - -

「薄荷、あるか？」

「あるぞ。ちよつと待て。」

商人は荷台に向かった。

血の色を踏みしめながらこっちに向かって来る顔は青かった。

吐けるものならすぐにでも吐きたかった筈だ。

だが、自分以外の誰かが休憩を言い出すまで耐えた。

「これでいいかの？」

小さな袋を目の前に差し出した。

無言で受け取ると立ち上がって嘔吐の音がする方に歩いてゆく。

ぶひひん、と馬が小さく嘶いた。

「お前さんも、心配か？」

馬に向かつて商人は問いかけた。

- - - - -

セレスは膝を折り、両手を地面につけて吐いていた。

背中が大きく上下し、辺りを酢えた匂いが覆う。

アドニスは四つん這いになって吐いてるセレスの手元にある水筒を拾った。

水筒に乾燥した薄荷の葉を入れて振った。

水筒を置いてしゃがんだ腰を伸ばそうとした瞬間、セレスが視界に入ってきた。

セレスは自分の口に指を突っ込んでいた。

アドニスの眉間が険しくなった。

「げえ・・・」液体が地面に落ち、斬鉄姫の背中が荒々しく上下する。

ゆっくり立ち上がると、アドニスは赤錆色の頭を凝視した。

何度も指を突っ込んで吐くセレスが赤銅色の両眼に映る。
暫くの間それを見ていた黒衣はその場から静かに離れた。

- - - - -

戻ってきたアドニスに商人が「どうだった？」と言いたげな視線を送る。

「もう少し時間がかかるな。」いつもの調子でアドニスは言った。

其の十三 黄土色（おづどいろ）

半時の後、セレスは二人の元に帰って来た。

「心配かけて御免なさい。」

ぺこり、と頭を下げた時、薄荷の風が吹いた。

「出るぞ。」

「今日中には峠を越えんとなあ。」

二人の気遣いが嬉しかった。

峠を越えて野宿の準備をしていると、アドニスがセレスに近づいた。

「もう寝ろ。」

寝袋と薄荷水の入った水筒をセレスに渡す。

「そうするわ。」

受け取るとセレスは荷台の側で横になった。

食事が始まる前に寝てしまえば、吐き気を催さない。

「予定通りでいい。」

焚き火を囲みながら二人は会話を続ける。

「いいのか？」

「ちゃんといってくる。問題ない。」

「・・・街に着いたら一週間程、商売したいんだが。」

「いいぜ。」

「決まりだの。」

次の朝、セレスは普段通りに起きてきた。

朝食を摂る。食べないと身体がもたない。

戦は待ってくれなかった。旅も待ってくれないのだ。

硬いパンを小さく千切って口に入れる。
薄荷水で胃に押し流す。

休憩の度にセレスは吐いた。

そしてきちんと食事を摂る。

鬼気迫るものを商人は感じていた。

何故そこまで、と思うが余計な詮索はするなと釘を刺されている。
自分に出来るのは、いつも通りに振る舞う事だ。

その日の夕食は三人で摂った。

普段と同じ他愛のない会話をするセレスと商人。

アドニスは干し肉を噛んでいる。

セレスはゆっくりパンを千切って胃に押し流す。

アドニスは時々唾を吐いた。

商人がやつと噛み砕いた干し肉を飲み込んだとき、様子に気付いた。
干し肉は塩分や肉の味を楽しむものだ。

何故出すのか？

アドニスが口から肉を取り出すと、セレスの薄荷水の中に入れた。

「そっち食つとけ。」薄荷水をカップに注ぐ。

繊維を分断された干し肉を見ながらありがとう、とセレスは言った。
返事をせずにアドニスはセレスの前にある干し肉を取り、口に持っていく。

商人は目の前に二匹の肉食獣が居る様な錯覚を覚えた。

翌朝商人が目覚めると、セレスの寝袋が空になっていた。
続いて聞こえる小さな物音。

何の音だと思い、目をこすりながら物音の方向へ行くと、
生い茂った草の間から剣を構えるセレスが見えた。

そして折れた剣で木に斬りかかる。

樹皮には幾重にも筋が刻まれていた。

半歩前に進み、斬り抜く。樹皮がぱつくりと口をひらく。剣は折れている。だから間合いの確認をしているのだ。今までと同じでは次の襲撃に対応出来ない。

もう一度同じ動作をするセレス。

樹皮に鮮やかな筋が刻まれる。

斬鉄姫は折れた剣を見ると小さく笑った。

商人は背筋が凍りつく思いでその場を離れた。

野営をした場所に帰ると、アドニスは既に起きていた。

「オッサン、メシにするか？」

彼等が自分の護衛で本当に、本当によかった。

祈る思いで商人は返事をした。

「そうするか。」

- - - - -

深緑を抜け、街道に行く。

セレスの吐く回数も随分少なくなってきた。

旅人が行き交う道は黄土色をしている。

ここまで出れば盗賊の類は滅多に出てこない。

印を結んだ積み石などで、不死者といった輩の出没回数も少ない。

商人は轡を取る。

セレスは荷台の側に行く。

アドニスは殿を務めた。

朝の冷たい空気が三人を包んだ。

「今日は頑張つて街まで行くぞい。」

「久し振りだわ。」

馬を進めながら商人は口を開く。

「お嬢さん、言いくいんだが・・・。」

なんですか？とセレスの問いに商人は意を決して言った。

お嬢さんの顔が見えないのが、救いだ。

「街で商売をするんだが、その、娼館で。」

「それで衣類が沢山あったのね。」納得した様子のセレス。

「で、あの、宿を娼館にしよう・・・。」

アドニスは何も言わない。予定通りだからだ。

「私は別に構わないわ。あ、それなら」

セレスだけ別に宿を取るつもりだった商人は、その事を口にしようとした。

「私、一人部屋にしてもらえたら助かります。」

「え？」お嬢さん、泊まる気なのか？娼館に？？

「ああいった場所は部屋に浴室が付いてるし、寝台は大きいから。久し振りに思いつきり手足を伸ばせるわ。」

出来たお嬢さんだ・・・。わきまえている。

助かるよ、と返事をしようとした瞬間

「おい！」

背後でアドニスが小さく叫んだ。

商人が馬を止め、後ろを振り返ると離れた場所で前のめりに倒れているセレスがいた。

その後ろから、アドニスがセレスを抱き支えている。

セレスの髪は黄土色の街道を撫でていた。

- - - - -

殿を務めるアドニスの視界に、前につんのめるセレスが飛び込んだ。
「おい！」

駆け寄り、前に倒れるセレスを背中から抱きかかえた。

間一髪で頭は地面にぶつからなかった。

肩を掴み腰を抱えてセレスを支える。

肩からアドニスの手がのろのろと離れ、ゆっくりと下を向いた顔を覆う。

小さな息が掌に当たった。

アドニスはセレスの背中に顔を埋める。

小さな安堵のため息が黒紅の背に消えていった。

オマエは壊れなかった。

自分と同じ黒衣の斬鉄姫は、ぐったりして動かない。

両膝をかかえ肩を抱くとアドニスの胸に青白い顔が埋もれた。

規則正しい息がアドニスの黒紅に消えていく。

離れた場所で心配そうに此方を見る商人がいる。

「オッサンが心配してるぞ。」

アドニスの言葉がセレスの額に落ちた。

此方に向かってくるのを見ると商人は荷台を空け始めた。

黙ってアドニスはセレスを荷台に上げる。

黒紅の外套を掛け、幌を下ろした。

「いくかの。」

「ああ。」

「メシ以外は休憩無しにするからの。」

アドニスは返事の代わりに左手を上げた。

ぶるるん、と焦茶の馬が同意する様に鬣を左右に振ると、そつと荷台を引き始めた。

黄土色の街道に二筋の轍が続く。

其の十四 緑青（ろくしょう）

その日の夕方、目的地に到着した。

商人は大急ぎで娼館に入っていく、アドニスは何の番をした。前に一度だけ利用したことがある大きな娼館だ。

商人が帰ってくると、二人と荷馬車は裏口へ回る。

馬を繋ぐとアドニスはセレスを荷台から下ろし始めた。

外套ごと抱きかかえ、裏口をくぐる。

商人は気を遣って離れを取ってくれた。

同伴用もしくは長期滞在用の離れが大きい娼館には大抵ある。華やかな喧騒とは無縁の静かな場所だ。

アドニスは中に入り、一人で入り口に戻ってきた。

入り口で待っていた商人は二つの鍵をアドニスに渡した。

「女将には言い含めてある。ゆっくりさせてあげてくれ。」

返事の代わりに左手を上げるアドニスに、商人は続けて言った。

「メシは外に置くようにした。それと」

緑青の衣類と袋をアドニスに渡した。

「お嬢さんの寝間着だ。お前さんの分はメシと一緒に届けさせるが、それでいいか？」

「十分だ。」

「わしの部屋は前と同じ場所だからの。」

商人と別れて荷を離れに入れるとアドニスは外扉に鍵を掛けた。内扉を閉じ、こちらも鍵を掛ける。

自分以外の介入は一切拒否した。

ソファーにセレスがもたれ掛かっている。

重ねたクッションに青白い顔を半分埋め、全身の力を放棄していた。

黙ってベルトに手を掛ける。ベルト穴は一番奥を使っていた。長靴を脱がせ靴下を取ると、マメでいびつになった小指が見えた。上衣を弛め、浴室に向かう。

ある程度は自分も覚悟していた。だが、ここまでとは思わなかった。おそらくセレスも同じだろう。

湯桶に商人が渡した袋から乾燥した薄荷を取り出し、浮かべる。爽快な匂いが部屋に充満し、空気が緑青に染まる。

アドニスはセレスの着衣を取り、身体を拭きだした。

セレスは動かない。湯を替えセレスの両腕と頭を自分の肩にのせた。「瘦せたな、オマエ。」

アドニスの手はタオルと言葉を連れて白い背中に落ちた。その上に静寂が薄荷の匂いと共に降り積もる。

緑青の寝間着に袖を通すため、セレスの手を取った。

潰したマメは既に固まっており、掌に柔らかさが無い。

細く長い指。だが、剣を握るせいで間接は太くなっている。

爪は少し伸びていた。短くする余裕が無かったのだろう。

肘と膝は衣擦れで硬くなっていた。踵も同じだ。

女性らしい手入れをしていない体。

その体を静かに抱き上げると衝立の横を通り、寝台へと向かう。瞼を閉じたセレスは何も見ない。何も聞かない。

細い息を立て、ひたすら眠っている。

寝台に横になるセレスを見ていたアドニスは外扉へと向かった。

外扉の脇に二つの籠があった。一つは軽い食事。

もう一つはアドニスの着替えや、二人の滞在に必要なと思われるもの。

二つの籠を抱えるとアドニスは二つの鍵を掛け離れを後にした。

食事の匂いも湯の音も、今のセレスには必要無いからだ。

- - - - -

「邪魔か？」

「いいや、いいぞい。」

籠を抱えたアドニスは商人の部屋へと入る。

「どんな様子か？」

「明日まで起きねえだろ。」

「ひとまず、安心だの。」

安堵の息と共に商人は言った。アドニスは返事をせず、食事続けている。

「武器屋はどの辺りだ？」

商人が目を瞞る。お構いなしにアドニスは続けた。

「折れてるからな。アイツが欲しがる。」俺達は護衛だ、と言外に言う。

「場所は紙に書いておく。話はつけておくから、好きなのを選ばせてやってくれ。」

「報酬から引いておけ。」

お嬢さんが嫌がるからの、と言いながら商人はテーブルへと向かった。

「オッサン、湯貰うぞ。」食事を終え、立ち上がりながらアドニスは言った。

「好きにせい。」紙片を渡しながら商人はからからと笑った。

離れに向かう途中まで商人と二人で歩いた。

娼館の女達が好奇の目で二人を見る。

一人は馴染みの商人。もう一人はその商人と一緒に一度だけ来たことがある男。

複数の媚びる視線がアドニスに纏わり付く。

一人の女が二人の進路を塞いだ。「ちょっと、兄さん。」

アドニスは何も言わずに去ろうとする。此処は商人にとって大切な取引先だ。

「待つてよ。」とアドニスの腕を掴んだ。

アドニスの片手は籠を持つている。着替える前の衣類が入っている。誰かを買いにきたのだ、と女は思ったのだらう。

アドニスは女に言った。

「何だ？」

「アタシと、どう？」一般的な物差しでいえば美人だ。

自分に自信がある者が売込みができる。そういう場所だ、娼館は。

「気分じゃねえな。」この場から離れようとする腕を女は引き止める。

「そんなこと言わずにさあ。」艶やかな微笑と共に小首を傾げ、下から男を覗き込んだ。

女ははつとして、手を引つ込めた。

アドニスは女を見下ろしている。

ただそれだけの事に、女は震え出した。

「明後日、行くんだな？」商人の声に返事の代わりに左手を上げるアドニス。

アドニスは離れへと向かった。

女将が慌てて飛んでくる。

「ちょっと、お前！！」アドニスを誘った女は女将に叱られていた。

- - - - -

鍵を二つ掛けるとアドニスも寝台に入った。

大きい寝台で眠るセレス。伸ばしたいと言った手足は赤子の様に緩やかに折り曲げていた。

背中が小さく、規則正しく動いている。

赤錆色の頭の下に左腕を滑らせた。背中に擦り寄る。

アドニスの右手はセレスのそれと重なった。

「頑張ったな。」

右手を指でそつと撫でながらアドニスは言う。

斬鉄姫は答えない。自分で答えを出したからだ。

斬鉄姫を必要とする人がいるから、吐いてまで応えようとした。

太い関節を持つ指の間に自分の指をくぐらせ、アドニスも眠りに付く。

戦士は眠れる時に、眠る。二つの寝息を緑青の空気が包み込んだ。

- - - - -

早朝、緑青の背中が動き出した。

重なった手はそのままに、むくり、と上体を起す。

「・・・ここ・・・どこ・・・？」

頭がはつきりしていない様子の声が寝台の上に落ちる。

左肘で体重を支え、辺りをゆっくり窺う。

「娼館だ。」声のする方へ頭が動いた。

小首をかしげ、緑青の瞳が肘枕を付いているアドニスを見た。

きちんと座った雪豹が呼び声のする方へ振り向くように。

「暫く此处で商売する事になってただろ。」

深く首をかしげた。雪豹は言葉の意味がいまいち呑み込めていない。

「寝とけ。」

セレスはアドニスの顔とは反対のほうにふいつと顔を向けると

ぽすん、と枕に頭を落とした。背中が小さく、規則正しく動き出す。

アドニスの眉間が思いつきり陰しくなる。

「・・・可愛くねえな、おい。」

不機嫌な声は深く眠るセレスには届かない。

「てめえ、本気で覚悟しとけよ。」

本気と書いてマジと読む。

アドニスはいささい欠伸を一つすると、赤錆色に顔を埋めて二度寝を始めた。

千紫万紅・中編 終

其の十五 鈍色（にびいろ）

太陽が中天を過ぎた頃、セレスは目を覚ました。寝台にいる自分。頭には霞みがかかって、はつきりしない。

ああ、私、ずっと・・吐いてて・・・確か・・

「街道で・・・」肘を付き両手で頭を抱える。

「ぶっ倒れた。」アドニスの声がした。

外は昼だが、窓を閉め切り遮光した離れはほの暗い。

衝立から鈍色の部屋着を着たアドニスが現れた。

布団から出て寝台の端に座るセレスにコップを差し出す。

受け取るとセレスはゆっくり水を飲み出した。

「娼館だ。オッサンは商売してる。」

水を注ぎながらアドニスは続ける。セレスは黙って水を飲む。

水差しが空になった時、セレスは小さなため息を吐いた。

「ありがとう。」

アドニスは何も言わずにコップを取ろうと手を伸ばした。

「湯に入るからコップがいるのよ。」

立ち上がるうとするセレスが言った。

汗をかき、身体の水分を吐き出す。そして補給する。

新陳代謝を促し、身体を目覚めさせる。手っ取り早い方法だ。

伸ばした手はそのままセレスの腰を抱き、アドニスは寝台から斬鉄姫を引き剥がす。

コップを持たない手は、アドニスの腕を掴んだ。

「浴室は向こうだ。」顎で指し示す。赤錆色の頭も同じ方を向く。

「水差しは入り口に置いてやる。」

セレスはコップを両手で抱え、浴室に向かった。

- - - - -

アドニス は部屋の窓を開け、空気を入れ替える。
外の眩しい光が部屋を覆った。

滞在中は天気が良さそうだ。荷に手を入れることが出来る。
洗える物は全て洗い、折れた剣も替えなくてはならない。

使い切ってしまった物は補給する。使い切りそうな物も見極め補給する。

やることは沢山ある。

「娼館でこのザマかよ・・・。」

娼館の女と一時を過ごすつもりだった。

元王族はそういった事に理解がある。だから一人部屋にして欲しい
と言った。

後宮というものを見て育ってきているからだ。

王妃だけでなく複数の女性が一人の王を取巻く。

血統を確実に残す為。

その上、戦場を知っている。

宿の代わりに娼館を借り上げる事はよくある事だ。

宿としての利用はもちろんの事だが、別の意味もある。

戦士は圧倒的に男が多い。

身体的にも精神的にも必要なのだ。

戦いの後、戦士の血を鎮める為。

そして一般人の女性を襲わせない為。

- - - - -

ソファの前で胡坐をかき、荷の確認をしていたアドニスは浴室の
方を振り向く。

セレスが頭を拭きながら出てきた。

空になったコップと水差しを抱え、アドニスの前を鈍色の部屋着が通る。

「おい。」テーブルの横にある椅子に座ろうとするセレスに声をかける。

「私、まだ水を飲みたいのよ。」

振り返るセレスに背後のソファアを親指で指し示す。

小さくため息を吐くと、セレスはソファアに向かった。

手にはコップを抱えている。

もう大丈夫だ。敵は手強い。

二人はソファアに座っている。

セレスは身体をよじり、コップを持たない手で身体を支え頭を垂れている。

アドニスはその頭を拭いている。石鹸と洗髪料は同じ香りを漂わせている。

この離れの浴室には、石鹸も洗髪料も一つではなく複数用意されている。

上等な部屋である証拠だ。

数ある中から柑橘系を選んだ、甘い匂いとは無縁の斬鉄姫。

「オマエ自分の髪、嫌いだろ。」

「何故解るの？」タオルの下から声がした。

「出発前、切るとゴネたからな。」

「・・・確かにね。」フイレスが嘔泣きしたから、折れてしまったわ。

続く言葉。苦笑いがタオルの下に隠れている。

「大嫌い。昔も、今も。」

多分、死ぬまでその思いは変わることはないのだろう。

頭を拭きながらアドニスはそう感じた。

頭を持ち上げながら、終わった？とセレスは言った。

「頭がボサボサだ。」

アドニスを手櫛で赤錆色を整え始めた。

セレスは止めない。戦士は休める時に、休む。

「俺が生きる世界の色だな。綺麗な色だ。」

セレスが眼を瞪る。

コップを持つ手に力が入るのをアドニスの視界が捉えた。

「貴方、油断ならないわ・・・。」

ありがとうでもなく、そうかしらでもない言葉。

「油断ならない」と来たか。

こんな反応、オマエぐらいしかしねえよ。

赤錆色を梳きながらアドニスは思った。

両手で梳く髪は、ほぼ乾いてきた。

「御主人に挨拶したい。女将さんにも。」

「行くか。」アドニスはさっさと立ち上がりソファから離れていく。

コップを見つめていたセレスは、少しの間の後ソファを立った。

アドニスはセレスの前に立ち、満たした水差しでコップに水を注ぐ。

「やっぱり油断ならない。」

コップを見ながらセレスは呟いた。

- - - - -

本館を二つの鈍色が通る。一つは商人と来た男。もう一つは同伴の女。

娼館の女達の視線がセレスに注がれる。

あの兄さんの女だって？女将さんが同伴だって言ってたよ。

こんな時間に本館に来るなんて、たいした自信をお持ちなこと。ふふ、聞こえるよ。

美人じゃないのさ。髪の色が珍しいからそう見えるだけでしょ。

色といえば目の色も珍しいわね。色が変わってりゃ、美人度も十割増しかあ。

いいなあ、アタシもそんな珍しい色で生まれたかったよ。同性、特に女性の目は厳しい。

「女が女の手配をするなんざ、最低だよ！」

娼館を借り上げる度に、礫のように飛んできた言葉。

「女將軍様はこんな生活しないでいいんだから、いいご身分だね。」

礫は鋭く飛んでくる。何度も聞いた。

事実だから仕方ない。受け止めるしかないのだ。

「心配かけしました。」

「いや、良かったよ。安心だ。」

「色々氣遣ってもらって。」

「何の何の。」からからと笑う商人。

「部屋はどう？」中年の女將が問う。

「とても静かでいいお部屋です。勿体ないくらい。」

「それは良かった。ゆっくり出来た？」

「ええ。寝台も大きくて、とても気持ちよかった。」

事情を知らないオネエさん達は、こっそり拝聴しながら頬を染めた。

「食事はどうするの？」

「まだ軽いものでいいです。身体が本調子ではないから。」

「俺は普通のでいい。」

セレスの腰に手を廻しながらアドニスと言った。離脱の合図だ。

「後で届けさせるからね。ごゆっくり。」

セレスは小さく笑い、二人は離れに向った。

途中でオネエさん達と目があつた。

赤錆色の頭は小さく会釈しながら通り過ぎた。

二つの鈍色は離れの外扉をくぐる。

「相当なタマだな、オマエは。」鍵を閉めながら面白そうにアドニスと言った。

「何か言った？」アドニスを通り越したセレスは内扉の鍵を開けながら問い返した。

其の十六 白銀（はくぎん）

翌朝、セレスは目覚めた。

十分眠ったおかげですつきり目覚める事ができた。

アドニス腕が肩にのっかっている。その手はセレスの右手を掴んでいた。

重なった右手でシーツを叩きながら「私、起きるわ。」

セレスが頭を起しながら声を掛けた。右手が離れ、濡羽色の頭が寝返りをうつ。

「ありがとう。」言うとき雪豹は寝台からしなやかに離れた。

ソファで寝間着を脱ぎ鈍色の部屋着に着替える。

着替え終わった頃、衝立の向こうから声がした。「メシ、取ってこい。」

「何処にあるの？」セレスの問いに

「表。鍵はテーブルにある。」返事をするアドニス。

抱えた籠をテーブルに置くとセレスは鍵を二重に掛ける。

二人の荷物がある。用心に越した事はないのだ。

特にアドニスの大剣は、あつらえた得物だから金が掛かっている。

何より盗られでもしたら大事だ。護衛の命綱でもあるのだから。

娼館を信用していない訳ではない。が、賊が必ず侵入しないという保障も無い。

- - - - -

朝食を摂った後、セレスとアドニスは荷を広げた。

やる事が沢山ある。自分が倒れた分だけ遅れをとった。

商人の気遣いで滞在期間が長いのが救いだ。

二つの頭は下を向き、忙しく手を動かしている。

「衣類は自分で洗う。洗い桶と石鹸はあるの？」

「用意すると言ってたから表にあるだろ。先に仕分けしとけ。衣類は分けて洗え。」

「干し場は？」

「裏。薄物を先に洗って乾かしとけば、昼から出掛けられる。」

「貴方、何処かに行くの？」

アドニス は顔を上げた。「オマエも一緒だ。」

セレス も顔を上げる。「私も？」

にやり、とアドニスは笑い「要るんだろうが。」と言った。

微笑んだセレスは「そうね。必要だわ。」と応えた。

- - - - -

昼食を取りに表に出たセレスは商人と鉢合わせた。

「お嬢さん、今日出掛けるんだろ？」

「ええ。お昼を摂ったらすぐに。」

「街着を持ってきたから、着るといい。」

朽葉色の布が籠からはみ出ていた。

「あの」言いかけるセレスに

「貸すだけだからの。洗濯して返してくれたらいい。」

「ありがとう。助かるわ。ちゃんと報酬から引いておいてね。」

笑いながらため息を吐く商人が「もちろんだわい。」と言った。

乾いた薄物を取り入れると二人は街着に着替えた。

同じ色、同じ仕立ての服。「また同じ・・・。」

思った事がすっかり口から出た。

アドニスは聞き逃さない。「てめえ、不服なのかよ。」

「そういう訳じゃなくて。」旅の間は特に問題ない。

だが娼館で男女が同じ色を纏うということは同伴を意味する。

アドニスは自分のせいで自由な時間が無いのではないか。

客を取られたオネエさん達が自分を見る目も険しい。

そして今日は武器屋に行く。

荷の手入れもまだ残っている。

「行くぞ。」外扉からの声はセレスの思考を遮った。

本館を抜ける途中で起きたばかりのオネエさんに出会った。

セレスは小さく会釈し、通り過ぎる二人の背中に「ども・・・」小さな返事が返ってきた。

- - - - -

街に出て、武器屋の扉をくぐった。この街にしては大きな店だろう。アドニスは折れた剣と刃を包みから出してカウンターに置いた。

「下取りに出せるか？」と問う。

若い店員は剣を抜き、「こりゃ、見事に真つ二つだなあ。一体何を斬ったの??」

セレスは会話に加わらず熱心に剣を見ている。

奥で作業をしていた中年の男がカウンターに来て折れた剣の刃を凝視した。

「お前さんが折ったのか？」上目遣いでアドニスを見る。

アドニスは視線で答える。視線の先のセレスは一つの剣を手にしていた。

「女が???」若い店員が大声を出す。他の客がびっくりして店員を見た。

「うるさいぞ。」でもよ、親父。」親子二代の武器屋だ。

そんな会話も耳に入らない様子のセレスは剣をゆっくり抜いた。ただそれだけの動作に、店内の空気が張り詰めた。

鞘を静かに小さな卓に置くとセレスは構えた。

小さく上下に剣を動かし、上段から空気を斬った。

「動いてみるか？」アドニスに「その必要は無いわね。」と答えた。

「何故？」親父が訊く。セレスは小さく笑つと「重心がぶれているから。」

「刃からあつらえてる時間はないぞ。」アドニスは言う。

「爺さん呼んで来い。」「わかった。」親子が会話する。武器屋は二代ではなく三代だった。

やりとりの後、息子は奥へ消えた。親父は上に飾つてある剣を指差す。

「あれはどうだ。」「気にはなつてたんだけど。手に取つていいの？」

普通に手が届かない場所にある物は特別なものだ。店が許可した者でないと触れさせない。

それを「どうだ」と訊いてきた。という事は手に取る資格ありと判断したのだ。

「俺が取る。」アドニスが言う。

こつちも相当な手練れだ、と親父はアドニスに踏み台を渡ししながら密かに思った。

剣を手にとつたアドニスはセレスに差し出した。

鞘ごと受け取ると、斬鉄姫は両手で剣を捧げ持った。

目の前まで持ち上げると瞼を閉じる。

一時の後、緑青の両眼を開き目の前で静かに剣を抜く。白銀の刀身がゆっくり現れた。

「鞘。」声を掛けたアドニスに鞘を渡すと斬鉄姫は構えた。

中段で軽く上下に動かす。次に上段からゆっくり振り下ろした。

「動け。」様子を見ていたアドニスが言った。

「いいかしら？」親父に問うセレス。

「場所を作る。待て。」いつの間にか戻ってきた息子と店内を片付け出した。

残っていた客も手伝う。

アドニスは鞘を持ったまま壁にもたれ掛かった。
カウンターを見やると一人の老人がカウンターの奥に立っている。
老人はセレスを見ていた。

「どうぞ。」親父の声にセレスは中央に歩み寄る。

剣を構えると型を取った。

正統な剣技。今の時代、ここまで綺麗な型を取る人間は数える程しか残っていないだろう。

空気を切り裂く音が店を支配し、周りは誰も声を出さない。

見れるだけでも価値がある。そんな剣技だ。

斬鉄姫が動くたびに、結っていない赤錆色の髪が鮮やかに舞う。
緑青の両眼と剣先が白銀の軌跡を刻む。

気に入ったな、とアドニスは思った。

持った瞬間、自分でも良い物だと解った。

「好きなものを選ばせてやってくれ。」

商人の一言。あれだけの思いをしたんだ、は続いて出なかった言葉。
それはアドニスの領域だ。黒刃は誰一人踏み込む事を赦さない。

赤銅色の両眼が光り、大きく一步前に進む。

反応した斬鉄姫は水平に斬りかかり、アドニスの首筋で刃を寸止めた。
した。

冷たく光る緑青。

オマエがいい。それ以外は要らない。

物騒な終わりの合図に二人以外の人間が凍った。

「気に入っただろ。」鞘を渡すアドニスの問いに、

「ええ。でも・・・」アドニスの首から刃を離しながらセレスは言葉
を切った。

「何だ？」親父が訊く。奥で老人が聞き耳を立てていた。

「柄が別物ね。」白銀の煌めきを鞘に収めながらセレスは言った。多分鞘も。続いた言葉は他の客を沈黙させた。

「爺さん、本物だ。」親父が奥に声を掛けた。

「いつまでこの街におる？」奥から爺さんが声を出す。

「後4日はいるな。」アドニスが答えた。

「そいつは刃だけがウチに来た。お嬢さんの言う通り柄はウチで付けた。」

「あの、私もうそんな歳では・・・」

「別嬪さんはみんなお嬢さんなんだ、ウチの爺さんは。」息子が続けた。

「悪いが今日は帰ってくれ。」親父が他の客に言う。

親子三代で久々にいい仕事に取り掛かれる、と三人は思った。

- - - - -

「アドニス、後払いで全部払える？」

娼館への帰り道セレスはアドニスに訊いた。

予想外の出費。セレスは真剣に問いかけてきた。

滞在中は離れで過ごす事と剣の代金の事は、武器屋に向かう途中で聞いた。

どうせなら良い物を、と思い白銀の刃を選んだ。

しかし、その後が大問題だったのだ。

柄のみならず鞘まで用意すると言い出した。

慌てて止めたが親子三人はヤル気満々でちつともセレスの言葉が耳に入らない。

拳句の果てには柄と鞘をどうするかで揉め出した。

壮絶な親子喧嘩を三代に渡って始め出したのだ。

大音量で怒鳴り合い、カウンターをばんばん叩き、床を踏み鳴らす。「うるせえぞ。」

ドスの効いた低い声で三人はやっと静かになった。ぜいぜいと三人

の息が店内に響く。

我に返りあとは任せて欲しい、と慌てた息子が二人を追いやった。

「逆に借金だろ。」少し俯き濡羽色を両手で撫で付けながらアドニスと言った。

華やかな衣装でもなく、美しい宝石でもない「剣」。

借金にはなるが、それを手に入れた嬉しさを隠しながら

「やっぱりね。書庫の仕事を頑張らないと。」

言葉とは裏腹に、隠した嬉しさをぼろぼろと道に落としながらセレスと言った。

其の十七 朽葉色（くちばいろ）

「小娘、どうしてくれるんだよ!!」

扉をくぐり大きな玄関に入った二人を客と思われる男の怒声が迎えた。

夕刻前で表は明るい。娼館はまだ開いている時間ではない。

若い男だ。取巻きと思われる男が二人いる。

娼館に引き取られて間もないと思われる14、5の若い娘が、ぶるぶると震えながら「申し訳ありません!」と平謝りしている。

男の仕立ての良さそうな服は果汁の染みが広がっていた。

そして剣を持っている。娘が怯えるのも仕方のない事だ。

娘の足元にはこぼれた果汁とコップが落ちている。

「勘弁してやって下さい。」女将も頭を下げている。

「勘弁?この服いくらしたと思ってるんだよ!」

「弁償させるよ。」

「勘弁してやらなくていいんじゃないの?」

若い男達が女将と若い娘を見やりながら会話をしていた。

「服代はうちが払いますから。」場をとりなそうとする女将。

騒ぎを聞きつけた仕事前のオネエさん達が遠巻きに見ている。

「当然だぜ、まったくよお!」大きな声に娘はびくりと身体を動かし、泣き出した。

「小娘、お前相手をしろよ。」

「この子は来たばかりで、許してやってください。」女将が慌てて割って入る。

「丁度いいじゃねえか。俺が手折ってやるよ。」

「俺も混ぜろよ。」「ずるいな、俺にもさせる。」「にやにやと笑う男達。」

様子を見ていたセレスが黙って娘の側に歩み寄る。

泣き出した娘の前に立つと「泣かないの。」言っただ娘の頬を強く拭く。

落ちたコップを拾うと娘に渡す。

「雑巾、持ってきてくれる？」娘は頷いて奥へと走り去った。

女将が安堵の息を小さく吐いた。

男達は突然の闖入者に反応できないでいたが、娘が去っていく様を見て事態に気付いた。

「このアマ、邪魔するんじゃないよ!!」

「関係ねえのにでしゃばるなよ!糞が!」

恫喝にもびくともしないセレスが言った。

「私は此処の客よ。」

卑しい笑いがセレスを取り囲んだ。

アドニスは玄関側の壁に背中を預け腕を組んでいる。

「女が女を買うってかあ?イヤラシイなあ。」

「嘘つくなよ、お前娼館の女だろ?」

「ホントだ、雌豚の匂いがするぜ。臭え、臭え。」

事態を見ていた娼館の女達の表情が険しくなった。

この男達は言っただならない事を言った。

セレスは平然としてる。その態度が三人の頭と思われる男の火に油を注いだ。

赤錆色の髪を掴み、顔を向かせると口を小さく尖らす。

水音と共にセレスの頬に染みが付いた。

当の斬鉄姫は眉一つ動かさない。

女達は殺気立ち、女将は眉を顰めた。

アドニスは動かない。

「私に触れることが出来るのは、私より強い男だけ。貴方にその資格はあるの?」

セレスは言っただ後、男の顔から剣に視線を移した。

「はぁ？お前本気で言ってるのかぁ。」けけけつと笑いながら男が言った。

「脅してやんねえと解らないんだろ。」残りの二人が続く。

「ココが弱そうだもんな。」馬鹿にする三つの笑い声。

セレスは視線で目を付けていたものを確認した。

暖炉。娼館が始まる夕刻からは冷える。

こういった場所の女は薄物を着ているから暖を必要とする。

暖を取りながら客を待つ。玄関が大きいのはサロンの役目もあるからなのだ。

男の手を静かに引き離すとセレスは暖炉へと向かった。

朽葉色が暖炉の側で止まり火掻き棒を掴む。

右手、左手。小さく交互に受けては投げを繰り返す。

にやにや笑いながら三人の男はセレスを眺めている。

女将と女達は息を殺してセレスを注視している。

右手で火掻き棒を持ち、手首を動かし重さを確認した。

小さく笑うと中央に立ち男に向けて言う。「解らせるんでしょ？来たら。」

剣を抜きながら頭の男が叫んだ。「うるせえアマだ！泣かせてやる！！」

朽葉色のスカートをむんずと掴むとセレスは片手で火掻き棒を持つ。垂直に立て自分の鼻先まで持ってきた後、緩やかに肘を曲げ一人の男を火掻き棒で指した。

細剣の構えだ。ここにきてアドニス of 赤銅色の両眼は光った。

「この糞女ー！！！」大声を張り上げながらセレスに斬りかかる。だが力いっぱい振り下ろされた剣は刀身より細い棒を分断する事が出来なかった。

セレスは火掻き棒で受けて流した。高い技術に拠る力加減がそこにある。

ひゅつと間髪入れずに男の耳の横を火掻き棒が突き抜ける。

逆上した男がつかさず下段から剣を持ち上げた。

足を伸ばし剣の腹を棒の先端で押しやる。そのまま斬鉄姫は手元を突く。

アドニスはセレスの動きを見ている。

細剣。戦場の斬鉄姫では絶対に拝める事は出来ない剣技。

オマエ細剣まで扱えんのか。アドニスの眼が朽葉色を映す。

スカートを掴み、朽ちた葉が風に舞うように娼館を優雅に舞う斬鉄姫。

いくら玄関が広いとはいえ、相手は剣だ。

その相手に無駄に動かれては壁に傷がつきかねない。

テーブルや椅子。壁に掛けてある調度品も又然り。

相手の動きを止める意味で細剣は最適だ。

細く鋭い突き。剣を使わせないように、紙一重の間隔で突いてくる。

朽葉色から白い脚が見え隠れする。足捌きも速い。引きの動きも正確だ。

自分の剣は無い。身体も本調子ではないと言った。

だから介入を決めた時点で火掻き棒に目を付けていた筈だ。

油断ならねえのはどっちだよ。声にならない空気の振動が朽葉色と共に舞う。

斬鉄姫は顔色ひとつ変えず男を突き、動きを封じる。

冷たい光を放つ両眼で男の状況を判断する。

息が上がってきたな。無駄な動きをするからだ。

どこもかしこも空きだらけだぞ。

お前は泥の中でも美しく咲き誇る花を侮辱した。花に対して口にしてはならない言葉を口にした。

私が赦す訳がなからう。

何の変哲も無い火掻き棒で剣を絡めとり、小さな息と共にそれを振り下ろす。

剣は床に喰いついた。

- - - - -

勝敗は決した。男は肩で息をしている。取巻きは啞然として言葉を失った。

女達も、女将も、いつの間にか帰ってきた娘も、何も言わない。

だん、と火掻き棒で床を鳴らす音が玄関に響いた。

セレスは両手を火掻き棒の上に置き屹立する。

他者を圧倒する気迫が空間を支配した。

そして王の審判の時、周りは沈黙する。

「娘に落ち度があったのは確かだ。だから娘とここの女将は謝罪した。」

その方は謝罪を受け入れ、賠償を受け入れた。」

支配する者のみが持つ高貴で尊大な声。

「だが、そこから先は話が違うぞ。無礼にも程がある。」

かつて敵を一喝した声が疾風となる。

「花を貶める権利は誰にも無い！！」

ディパン王家に名を連ねる斬鉄姫セレス。

朽葉色は王者の風を呼び起す。

床に突き刺さっている剣の横で男は黙っていた。

どす黒い怒りが全身を染める。

この女は俺を馬鹿にした！傲慢な態度を取りやがって！！

肘を曲げ、両手の拳をきつく握り締め、その手がぶるぶる震え出す。男の拳が振り上がると同時に、アドニスの背は静かに壁から離れた。

其の十八 月白（げっぱく）

男の拳は宙で止まった。

月の光に照らされる氷の色。そして全ての空気は月白に染まる。

無言で斬鉄姫に忍び寄るアドニス。

艶やかな濡羽色の髪は後ろに撫で付けてある。

整った顔は無表情だ。

朽葉色の下には鋼の身体が息を潜めている。

敵を味方までも畏怖させる、黒刃のアドニス。

絶対零度の中、一人を除いてこの場に居合わせた者全てが凍りつく。

アドニスはその一人の背後から腕を廻し、無表情のまま肩と腰を抱いた。

白い首筋に顔を落とす。

男は硬直した。顔色が空気と同じ月白に染まる。

女の背後に同じ朽葉色を着た黒髪の男がいる。

その男の表情は女に埋もれて見えない。

見えない分、不気味さが男の中で増殖していく。

アドニスは腰から離れた手で男から視線を外さない斬鉄姫の頬を挟み、顔を引き寄せた。

鼻先で首筋をなぞり、そのまま顔の輪郭を確かめる。

頬を挟んだ手は乾いた唾がこびり付いたセレスの頬を指で撫で始めた。

もう一方の頬は自分のをそつと擦り付けた。

「誰に貰ったんだ？」

低く、そしてひどく優しい声が問いかける。

知っている筈の事を黒髪の男は女に訊く。

ずっと自分を見る女の視線と、これ見よがしに突きつけられた頬が

答えた。

お前がやった。撫でる指はそう言っている。

全身の血が引き男は震え出した。

許しを請う様にセレスを見るが、セレスは何も言わない。
首からゆっくり離れていくアドニスの口が歪んでいる。

「俺の女に手を出した。何されても文句は言えねえだろ。」
自分の血を奪ったような両眼。

その血なまぐさい色が不気味に光り、男を覆う。

血は死を呼ぶ。髪は死神の色。

笑った口から出た言葉は何の宣告だ？

「文句」を「言えない」。

「口」を「封じる」。

「殺される」その一言が男の頭を支配した。

- - - - -

アドニスの大きな手がセレスの頬を離れ、徐々に男に向って伸びる。

男の顔を覆った瞬間、指先に力を入れた。

「ひいひい」男は喚きながら顔から手を離そうと両手でアドニスの腕を掴む。

斬鉄姫の声が男の腕を掴む。

「今度は私の男に手を出すのか？」

黒髪の男は咽で笑い出した。可笑しくて仕方が無いといった風に。

男はのろのろと朽葉色の腕から手を離れた。

それを合図にアドニスは薬指をじわじわと動かしながら斬鉄姫に言った。

「半端な情けかけやがって。」

指が男の目尻で止まると同時にアドニスはにやりと笑った。

「何で決らなかった。」

楽しそうなアドニスの声が絶対零度を支配する。

男は目を睜る。指の間から見える黒髪の男が視界から逃げてくれない。

不気味な光を放つ赤銅色の両眼で自分を見下している。

口は薄く開き吊り上っている。視界の端に指の腹が焼き付く。

「か・勘弁・して下さ・い・」

男は息も絶え絶えに言葉を出した。

斬鉄姫が口を開く。

「勘弁してやらなくていいんじゃないの？」

月白の氷が割れた。

- - - - -

花たちは三人を睨みつける。

この三人は娼館の禁を破った。

店が開く前に乗り込んできた。

謝罪と賠償を受け入れた上で強引に生娘に手を出そうとした。

同伴中の男女はどちらにも手を出してはならない。その同伴中の女に手を出した。

姐さんは自分を「客だ」と言った。

それを勝手に娼館の女と決め付けた上、侮辱し、逆上して殴りかかろうとした。

女将は娘に小さく耳打ちする。娘は雑巾を持ったまま奥へ消えていった。

アドニスの手の下の顔は意識を放棄した。

残りの二人は我に返る。

自分達がした事をそっくりそのまま返されている事に気が付いた。

二人が辺りを見回す。娼館の女達の冷やかな目。女将は立ったまままだ。

黒髪の男は女の背後から腕を伸ばし失神した仲間を掴んでいる。女は火掻き棒に手を置いたままその仲間を凝視している。

助けてくれる人は誰もいない。それだけの事を自分達はしでかしたのだ。

「ほ……本当に……勘弁し……て……下さい。」

「す……すみま……せ……ん。」

床に額を擦り付け謝罪の言葉を言うのがやっとだった。

誰も返事をしない。この審判は王が下した。受け入れるか否かは王が決める。

視線がセレスに集まる。アドニスは男を見ている。指は動かない。

「女将。」王の呼び声。

「はい。」女将は返事をした。

「賠償と枯れた花は用意したか？」

「勿論です。」

「そちらの意思は？」

「同じです。」

「取り計らえ。」

賠償は初めに申し出て相手は受けた。だから払うのだ。

三人が初めから禁を破っているとはいえ、粗相をしたのは娘だ。後々文句を言わせない為にも此方に落ち度があつてはならない。

枯れた花は娼館側の拒絶を表す。

貴方達は花を摘む資格はありません。そして花は相手をしません。娼館は今後一切貴方達の来訪を拒否します。

セレスはアドニスの手に自分の手を重ねた。アドニスは指の間を開いた。

アドニスの手を掴んだまま自分の腰に廻す。

男が床に崩れ落ち、二人の視界から消えていく。

二人は月白の中に立っていた。

- - - - -

小さな袋と枯れた花を持った二人の男が玄関から逃れようとしていた。

「忘れ物だ。」セレスは火搔き棒で床に突き刺さった剣を叩いた。金属音が二人に鮮やかな剣技を思い起こさせる。

生きた心地がしないまま、月白の空気の中に二人が侵入する。

二人がかりで剣を引き抜こうとする。

「決るか。」低い笑い声。

慌ててもう一人が床に寝ている男を背中から抱き起こした瞬間、空気を切り裂き、アドニスの苛烈な靴底が失神していた男の右肩にめり込んだ。

踏み出した勢いでセレスが小さく揺れる。アドニスはセレスを受け止める。

骨が碎ける音と共に、二人は身体で扉を開き吹っ飛んでいった。

その場に残った一人は慌てて剣を抜き、転がるように玄関から逃げていった。

玄関の扉に向って伸びた黒刃はゆっくり床に戻る。

兄さんは赦す気なんて無かったんだ。

唾を吐きかけられても、娼婦呼ばわりされても姐さんは何も言わなかった。

花を庇ってくれた。

愛で、褒めてくれる人間は沢山いる。彼等は摘むだけだ。

腹の中で、そして世間がどう思っているかなんて自分達だって知っている。

だが、それを此处で口にしてはいけないのだ。

泥の中で生きていくしかない花。その花に一時の慰みを求める者。

花を求める者は花に敬意を表さなければならぬ。
どんな感情であろうと己の心中を言葉に、態度に出してはならない
のだ。

- - - - -

「肩、潰れたわ・・・」セレスが声を出した。
腰から離れたアドニスの手をセレスは離さない。
アドニスはセレスの肩に顎をのせながら言う。

「長い足を伸ばしただけだ。」

「足も踏めばよかった。」

「痛いからやめろ。」

セレスはアドニスの掌に小さく唇を押し付け静かに解放した。
肩から顔を離すと二人は女将の方へやってきた。

「助かったわ。」火掻き棒を受け取りながら女将が言った。

「いえ、お騒がせしました。」すまなそうにするセレス。

「おおい、武器屋に行つて来たぞ。入れ違いになったの。」

奥から出てきた商人が会話に加わる。

「5日後になるそうだ。三人が鞘で大騒ぎだったぞい。」からから
と商人は笑った。

「再開したのか。」アドニスは呟いた。

「本当に柄だけでいいのに。」困惑するセレスの声。

「あの鞘で渡したら名折れだの、柄の意匠がどうか。ありや近所
迷惑だの。」

女将は三人を見ながら問いかけた。

「剣が要るの？」

微笑と共に斬鉄姫が答える。

「私、御主人の護衛だから。」

娼館の全員が納得した。それであんなに強いんだ。

アドニスが離脱の合図をした。

離れに向い始めた二人に声が後を追う。

「ありがとう。」「胸がすつとしたー。」「すごい勢いでふつと
んで行きやがった。」

「布団も真つ青だね、ありや。」「アンタ、寒いよ。」

「姐さん、カッコよかったわあ。」「姐さんは護衛だもん、当たり前だよ。」

振り向き驚いた顔をしたセレスが言った言葉は

「私に妹がいるって、なぜ分かるの？」

どっ、と笑う花たちを後にしながら二人は離れへと消えていく。

外は薄暗くなり始めた。娼館は今から勝負の時を迎える。

気の早い白い月が空に顔を出していた。

其の十九 飴色（あめいろ）

「あの、相談があるんだけど・・・。」

出発を三日後に控え、アドニスと商人は玄関のテーブルに飴色の地図を広げている。

旅の打ち合わせの真つ最中だ。

娼館のオネエさん達がその二人に話しかけた。

商人が顔を上げた。

- - - - -

玄関から二人は離れに戻った。

セレスは浴室に入りアドニスは長靴の手入れをし始めた。

珍しく外扉を叩く音がしてアドニスが鍵と扉を開けるとセレスが底をつた娘がいた。

「女将さんが・・・掃除をしてあげなさいって・・・。」

アドニスに対して怯えている。普通の反応だ。

「入れ。」

アドニスは箒と雑巾、替えのシートを持った娘を中に入れた。

アドニスは床の荷物をテーブルに上げ、椅子に座って長靴の手入れを続ける。

娘は掃除を始めた。

離れの掃除は同伴中のどちらかが居る時でないと行ってはならない。相手の同意というのは勿論だが信用という面でも必要な事だ。

掃除を終えた娘が足元の道具と替えたシートを抱えようとした時、セレスが浴室から出てきた。

鈍色を着て頭を拭くセレスが視界に入る。

美しい人。こんな風に生まれたら、此処に来なくても済んだかもし

れない。

自分と鈍色とを比べ、娘は俯いてしまった。

俯いて立っている娘の視界にいびつな足の小指が現れた。

はつとして顔を上げる娘の前にセレスは立ち、その頬を強く撫でた。娘の頬にこわごわとした硬い感触が残る。

「花は一人一人違う強さと美しさがある。貴女もそれを持っているのよ。」

「はい・・・。」返事をしながら娘は思った。

この人は己の美を誇る生き方をしていないのだ。

美を誇れば楽に生きられる。娼館でなくとも男は惜しみなく金と時間を注ぎ込むだろう。

護衛という死と隣り合わせの仕事。そこを選んだのだ。

「部屋が綺麗になったわ。ありがとう。」

微笑むセレスに娘は「はい。」と笑顔で答え、ぺこりと頭を下げると掃除道具とシーツを抱え出て行った。

アドニスとはソファアに座り鍵を掛けに外扉に向かったセレスを待っている。

戻ってきたセレスに自分の横を顎で指し示す。

小さくため息を吐き、テーブルに鍵を置いたセレスがソファアに座る。

アドニスはセレスの頭を拭き出した。離れにいる間の日課になりつつある。

「今日は色々あって疲れた。」

「凄まじい剣幕だったな、オマエ。」

「ああいう時は大袈裟なくらいが丁度いいのよ。」
タオルの下の声は笑っている。

「アドニスも凄かったわよ。」

セレス以外の全てが恐れをなしたアドニス。斬鉄姫の名は伊達では

ないのだ。

「ああいう時は大袈裟なくらいがいいんだろ。」

顎を持ち上げ顔を自分の方に向けさせる。タオルをセレスに渡すと髪を乾かし始めた。

「アドニス、貴方ねえ・・・。」

困った顔で自分を見る斬鉄姫。

「二度と剣を持たせない様にしたでしょ。」

てめえはよく解ってる。

- - - - -

決るつもりだった。

「勘弁してやらなくていいんじゃないの？」

赦してやるつもりなど微塵も無かった。

剣に斃れる覚悟の無い奴が剣を帯びる資格は無い。

負けを負けと認めない奴は勝負を受ける資格も無い。

下衆な見栄で剣を持つなど論外だ。

自らの血を流す覚悟の無いその下衆が赤錆色を掴み、唾を吐いた。

娼婦呼ばわりされようが侮辱を受けようが当事者はセレスだ。

斬鉄姫は娼館の事態を丸く収めるために計算の上で娼館に介入した。

だから動かなかった。

だが、それ以外で手を出すのであれば話は別だ。

猶予を与えてやった。

そして下衆は自ら署名した。

だから動いた。

俺は徹底的に潰す。

娼館の決着が付いた後、決ろつと指を動かした矢先、オマエの手が止めた。

気付いていやがった。

掴んだ手のまま自分の腰を抱き当事者は私だと主張する。

下衆を庇うな。腰の手に力が入る。

オマエの手は俺の手を強く握る。

手を出すなという。

だから足を出した。それだけの事だ。

たまたま今回は蹴りで済ませてやっていいだけの収穫があった。

要するに虫の居所が良かった。

ひとつは戦場では絶対に見ることが出来ないであろう細剣を操る斬鉄姫。

そしてふたつの言葉。

「私に触れることが出来るのは、私より強い男だけ。貴方にその資格はあるの？」

「今度は私の男に手を出すのか？」

介入という計算の上で出た言葉だ。

だが数多ある言葉の中で、それを選び口にした。

- - - - -

「剣か。オマエ、細剣扱えたんだな。」

「他も一通り手習いはしたわよ。剣が一番合っていたから選んだ。」

「火掻き棒で細剣かよ。初めて見たぞ。」

セレスの首に顔を埋めアドニスは何で笑い出した。

「笑わないでよ。仕方無いじゃない。」

「前は箒で今度は火掻き棒とは、やるじゃねえか。」

笑いながら片手をソファの背もたれに伸ばし、

もう一方でタオルを取りながらセレスの腰を密かに抱く。

「貴方だって大剣以外を扱うじゃないの。」

「俺は剣ぐらいだ。」

黒豹が頭を摺り寄せながらごろごろと咽を鳴らす様に。

いつでも相手の咽笛に牙を立てられる様に。

「一通りには、大剣も入るのか？」

鈍色の肩に顎をのせ問う。

「あれは初めから論外よ。あんなの扱える訳ない。」

濡羽色にセレスの頬が触れ、声が触れる。

剣の話をしているセレスは無防備に近い。

近いだけであって、全くの無防備ではない。

「酷い言い様だな、おい。」

背もたれに伸ばした肩に頭を預けアドニスと言った。

静かに腰から手を離しタオルを腿に置く。

セレスは前方を向き、一時の後、怒った様に言った。

「剣に振り回されない力と精神力。大剣もそれに見合っただけのもを求められる。」

並の戦士では無理です。」

「斬鉄姫は並か？」

振り返ったセレスにアドニスは顔を近づけふふん、と鼻先で笑った。

斬鉄姫は黒刃と同じ色の髪に指をくぐらせながら

「黒刃がそれを問うの？知ってる癖に。」

雪豹は尻尾でアドニスの頬を軽くはたき、するりと離れていった。

「夕食取ってくる。」

- - - - -

「お嬢さんにか？そもそも受け取らんぞい。」

「そこを何とか。」

オネエさん達はセレスにお礼をしたい、と二人に申し出た。

同伴中の男女はどちらか一方が一人にいる時に声を掛けるのはご法度だ。

だからアドニスを誘った女は女将に怒られた。
だから商人と一緒にの時を狙って相談を持ちかけた。
商人が一緒だから別の意味で安心、安全でもある。
この申し出はアドニスに対する礼も密かに含まれている。
兄さんが足を上げたのは姐さんの為だ。
自分達はオマケにさえなっていないかも知れない。
それでも庇ってくれた事には代わりが無い。
それに姐さんが喜ぶ事は兄さんも悪い気はしない、といいんだけど・
・。

お相手がいる場合は本人よりまず相手の許可を取らなければなら
ない。

それも娼館の決まり事の一つだ。

とにかく兄さんの許可は絶対条件！

「わしは思いつかんの。お前さんは？」商人がさりげなく話を振る。
地図から視線を離さないアドニスは無言だ。
祈る思いでオネエさん達はアドニスを見る。

重苦しい沈黙が幾重も重なり玄関を包む。

祈りの対象は何も言わず、地図から顔を上げない。

やっぱりダメなんだ・・・。オネエさん達が諦め立ち去ろうとした
時、

「妹がみやげを欲しがった。」地図にある二つの山を見ながらアド
ニスは言った。

許可が下り、更に受け取らせる方法まで教えて貰ったオネエさん達
の顔が明るくなる。

「ありがと！兄さん！！」「本当にありがとう！！」

「その手でいこう！」「妹さんがいるって言ってたもんね。」

「あの髪飾りがいいよ！」「ううん、あの髪の色なら大通りの店の
がいい！」

「無理だ。」赤銅色の眼は山越えのルートを確認しながら一刀両断切って捨てた。

「髪飾りはダメなんだ……。服は？」

「それは無理だとわしでも解るぞい。」

「それならさ……。」「一人がなにやら小声で呟いた。

「兄さん、どう？」必死の形相でアドニスを見る。

商人までもがつられて同じ表情になる。

「何とかなるだろ。」迂回する街道を指で歩きながら濡羽色の頭が言った。

「よっしゃー！」「どんなのが良いかな？」「そんなの、調べりやすぐだよ！」「

「すぐお店にいこうよ！」「他の意見も聞いてからにしないと、怒られるわあ。」「

飴色の地図の上を花びらが舞う。

きやあきやあ言いながら花たちは去っていった。

其の二十 本紫（ほんむらさき）

早朝よりも早い時、空と街を本紫が包んでいた。

二人は荷を持ち娼館の玄関に向う。

この街での商いが終わり、商人が次の目的地へ向うためだ。

長い滞在でセレス身体も完璧とまではいかないが、本来に近いものになっていた。

荷や身の回りの品に手を入れることが出来た。

そして斬鉄姫は新たな剣を手に入れた。休息は終わりを告げようとしている。

商人とアドニスが打ち合わせをする横で椅子に腰掛け、

髪を結おうとセレスが手を持ち上げた時、女将やオネエさん達がやって来た。

「こんなに早く、何かあったの？」

「今から出るんですよ。見送りたいってウチの子達がねえ。」

苦笑する女将の言葉を合図に、一人のオネエさんがセレスの前に立った。

男達は一瞬の沈黙の後、会話を続けた。

「姐さんは花の誇りを守ってくれた。感謝の意味で贈り物がしたいんだ。」

セレスは慌てて立ち上がり勢いよく両手を振った。

「そんな気遣いはしなくていいのよ。逆に騒ぎを大きくしてしまっ
たし。」

「でも贈りたいんだ。ダメかな？」しゅんとした様子のオネエさん達。

「駄目よ。自分の為に時間もお金も費やすべきよ。」

口火を切ったオネエさんは俯いた。

姐さんはわきまえてる。同性で此処までの人はそうそういやしない。

でも、だから、受け取ってもらいたいんだ。

―将を射んと欲すれば先ず馬を射よ―

「妹さんと二人分用意したんだよ・・・」

俯いたオネエさんは泣きそうな声で呟いた。

「そ、そうなの??」戸惑う様子のセレス。

俯いたオネエさんは床を見たまま舌をだす。

「そうなの。妹さんも喜ぶよ!」「二人で仲良く手にする顔が見えるね、アタシには。」

「そうそう、じっくり選んだんだ。妹さん絶対気に入る。」

ここぞとばかりに畳み掛けるオネエさん達。セレスは小さくため息を吐いた。

アドニスとは折れたなと思った。

「じゃあ、お言葉に甘えて受け取るわ。」苦笑と共にセレスは言った。

「うん!ありがとう!!」少女の様にオネエさん達も笑った。

商人は小さく安堵した。オネエさん達の厚意を受け取って欲しいのは無論だが、

商いをする者として、いい繋がりを作っておく事も大切なのだ。

あの娘が二つの小さな瓶をセレスの前に差し出す。

硝子には細かな絵が描かれていた。一つは葉でもう一つは花。

「香りね。綺麗な瓶。」覗き込みながらセレスは言った。

「あのね、葉が姐さんで、花が妹さんなの。」娘が笑いながら説明する。

「あの子も喜ぶわね。花の香りが大好きだから。」

私とは逆なのよ、とセレスは小さく笑った。

「姐さん、そのままでもいいから香りを確認してよ。」「そっか、仕事前だもんね。」

セレスは娘が持つ葉の描かれた瓶の蓋を開けた。

柑橘系の香りがゆらゆらと辺りを漂う。

「いい香り。とても気に入ったわ。本当にありがとう。」

娘にもつたいないから閉じるわね、と言ってそつと蓋を閉じた。

「絶対気に入ると思ったんだー。」「ほら、こつちでよかったじゃないのさ。」

「アタシはまだそうは思っていないけどね。」「今度来た時そつちにすりゃいいじゃない。」

笑いさざめく花たち。その笑いは玄関の扉を叩く音で止んだ。

「お持ちしました。」「開く扉の音がした。

そして武器屋は剣と共に静謐を運んでくる。

- - - - -

親子が玄関中央に立ちセレスを待つ。

セレスはもう一度オネエさん達に礼を言い、娘から瓶を受け取った。

二つの瓶を大切そうに荷の上に置くと「わざわざすみません。」セ

レスが言った。

爺さんが返す。「収めさせてもらっただけでも光荣です。」

武器を扱う者にとって、最高の戦士に最高の剣を収めることは無上の喜びだ。

代価を受け取らずとも収めたい――

昔気質、職人氣質の武器屋、鍛冶屋は今の時代は少ない。

アドニスも剣を打ってもらっ為、ずいぶん探したものだ。

黒衣が三人の前に立つ。爺さんの両手にある本紫の包みを息子が開けた。

白銀の鞘、白銀の柄。「見事です。」見てセレスは言った。

その一言で数日間の苦勞が報われる。こんな仕事は一生の内何度
も出来るものではない。

感謝するのは此方です。本紫から親子三人の言葉にならない言葉が聴こえる。

剣をベルトに装着しながらセレスは商人に声を掛けた。

「御主人、時間をいただきたい。」問うのではなく欲した。

セレスの視線を受け、商人は礼を執る。

「演舞を舞わせてもらう。」元王族の戦士は言った。

商人と女将が顔を引き締め、武器屋は大きく目を瞪る。娼館の花たちは口に手を当てた。

アドニスの口許は小さな笑みを刻んだ。

黒紅の斬鉄姫は白銀の剣を帯び、玄関を背に中央に立つ。

他の者は斬鉄姫の正面に集まり、立つ或いは椅子に座って静かに始まりを待った。

アドニスはセレスの正面で腕を組み、後ろの壁にもたれかかっている。

緑青が静かに光り斬鉄姫は剣を抜いた。

ゆっくり足を伸ばし、剣を頭上に持ち上げる。

斜めに素早く斬り抜き、持ち上げ、切り替えし、中段からゆっくり水平に払う。

演舞は演武の一つであり、舞の要素を取り入れている。

正統な剣技の者でないと美しく舞えない。

緩急があり直線と曲線の複雑な動きの組み合わせで構成された動き。手首を返し地面と垂直に刃を返す。

だん、と踏み込む音が響く。踏み込んだ足を軸にもう一方が床に弧を描く。

空気を切り裂く音と足捌きの音が楽の音となる。

赤錆色、緑青、黒紅、白銀が空間を彩る。

「綺麗・・・」誰かが呟いた。

「一生に一度拝めるだけでも僥倖だ。」

親父が黙れという言葉の代わりに言った。

- - - - -
指先で柄を繰り、肘を伸ばして天に向け剣を高く上げる。
一時の後、ゆっくりセレスは剣を収めた。

辺りを静寂が包み込み、斬鉄姫は鮮やかな色彩を纏い立っていた。
誰も何も言わない静かな玄関でアドニスは中央に向かい歩き出した。
色彩の余韻を、全ての色を呑み込んだ黒が引き裂く。

「冥土の土産が出来たな。」武器屋の横を通りながらアドニスが言
った。

「まったくじやわい。」爺さんが椅子から立ち上がる。

オネエさん達は別れの時間が来た事を悟り、静かに泣き出した。
女将も目元をそっと拭った。商人は焦茶の馬を引きに裏へと廻る。
アドニスはセレスに何事か言っていると荷物の方へ向った。

黒い大剣を鞘ごと背中に担ぐアドニスを武器屋の三人が見る。
荷物を持つアドニスを横から見ながら親父が言った。「お前さん、
重戦士か？」

返事の代わりにアドニスの横顔がにやりと笑った。

「打たせたのか？」爺さんが問う。

「納品に本紫を使う奴が訊く事か？」

- - - - -

本紫。紫は王を表す。王族しか使用しない色である。

エインフェリアになる前のアドニス達が生きていた頃は禁色だった。
今の時代は禁色なのかどうかは黒刃と斬鉄姫は知らない。

一般人で本紫を手にする事が出来るのは王家御用達の店、職人のみ
だ。

それだけの腕は勿論の事、目利きでないと御用達にはなれない。

王族は商人、職人を試す意味でも最低限の事柄しか指定せず

後は任せるといった納品もしばはあるからだ。

指定された品物を納品する際に本紫で包み、王家に収める。

そして本紫は例外としてこれぞと見込んだ者にのみ、敬意を表する意味で使用する。

これに関しては本紫を扱う店に一任され、王族も黙認していた。

王族以外に本紫で納品することは滅多に無いからだ。

納品に出向いて来たのも、本紫を使ったのもその表れだ。

アドニス以外にセレスが何者なのか知る者は無い。

武器屋がそれだけの価値を見出した相手がたまたま元王族だった。

「呆れるわよ、普通。貴方も貴方だけ……」

打った刀鍛冶も刀鍛冶だとセレスはあの時言外に言っていた。

セレスは刀鍛冶にも呆れていたのだ。

よくぞこれだけの剣を打ったものだ。

アドニスの場合も刀鍛冶は納品に來るといつて引かなかった。

他の街の刀鍛冶だが、ヴィルノアまで出向くと言いつ張った。

「仕事まで時間が無い。商人に預ける。」

「本紫の名折れだ！わしに恥をかかす気が……！」

「お前の勝手な理由だ。俺は時間が無いと言った。」

折れる、と言外に言われた刀鍛冶は

せめて今包ませるとアドニスの目の前で仕上げ前の刀身に本紫の布を掛けた。

武器屋は与えられた中で仕上げる。

柄はどれを選ぶか。握り具合、重さ。

何より刃と合わせるときは慎重にしなければならない。

抜く時と収める時に邪魔にならない最適な鞘はどれか。

戦士とはいえ女性だ。重さや幅はどうするか。

意匠はどれがいいか。一から彫金している時間は無い。

足りない部分があれば彫金師を頼み手を入れる。

彫金することで全体の重さや調和が崩れないか。

細かい指定を斬鉄姫はしなかった。

任せても大丈夫という意味だが、武器屋にとっては自分たちの腕を試されているのだ。

しかも納品先は数少ない綺麗な剣技を操る者。熱が入るのも無理はない。

- - - - -

「それもそうだ。」爺さんは言った後、セレスに向かい歩き出した。セレスは瓶を荷に仕舞おうとしている。

「お嬢さん。」「はい。」

もういちいち否定する事を諦めたセレスが返事をした。

「わしの代の本紫は役目を終えた。お嬢さんのおかげで最後にいい仕事が出来た。」

セレスは何も言わずに微笑んでいる。

「その瓶をこれで包んで下さい。」両手で紫の布を差し出した。

緑青が静かな光を湛える。爺さんから親父へと代が移るその時なのだ。

「二人の意思は？」セレスは親父と息子に問い掛ける。爺さんは本紫を見て笑った。

「先代の思う通りにして下さい。」当代となった親父が静かに答える。

「次代を担うものとして、お納め下さい。」将来を見据えた息子が力強く続ける。

「では受け取ります。」親子三人は礼をした。

セレスは本紫を爺さんから受け取った。

武器屋の三人とその心遣いに微笑むと二つの瓶を大切そうに本紫で包み、荷に仕舞った。

「兄さん、姐さん、又来てね!」「素通りしたら、恨むから!」
「次はアタシの見立てた香りをつけてよ!」「アンタ、まだ言ってるの。」

「オツチャン、衣装、忘れないでよ!」「何色だったか覚えてる?」
花たちが泣き笑いしながら言葉をかける。

女将と武器屋は恭しく頭を垂れた。

轡を取るアドニスの中は本紫に隠れている。

荷台の横で商人は「また来るからの。」と笑いながら手を振る。

殿のセレスは小さく会釈をした。結ってない髪が揺れる。

三人は娼館を去り、本紫の闇に消えていった。

其の二十一 黒檀（こくたん）

三人はヴィルノア郊外で別れた。

空は雲が覆い、月も星も見えない。嵐が近いのだ。

旅で携行した食糧を無駄にしない為と、二週間後にゾルデに出発する打ち合わせの為

最後の夕食はヴィルノア郊外に到着する前に三人で食べた。

報酬は全てアドニスが受け取った。この話を持ちかけたのはアドニスだ。

そしてセレスはアドニスに借金をしている。

小走りで街に向かっている途中で雨が降ってきた。

初めはぽつぽつと落ちていた雨粒が急に桶をひっくり返したように勢いよく降り出す。

黒衣の二人は荷物を持ち大急ぎで街へと向う。

「そっちの荷物寄越せ」駆けながらアドニスがセレスに言った。

「でも！」「うるせえ、早くしろ！」「有無を言わず言葉を続ける。

「剣に外套掛ける！」「ええ！」「叫びながらセレスは外套を脱ぎ、

アドニスの大剣に掛けた。

ヴィルノアは嵐で民家も店も雨戸を閉め灯りが僅かしか無い。

その灯りを吹き飛ばそうと風が猛烈な勢いで街を黒檀に染める。

雨音が二人の声と足音を飲み込んで夜の街にうるさく響いた。

- - - - -

二人はアドニスの家に入る。留守にしていた家の家具には埃除けの布が被せてあった。

「オマエ火を起せ。」荷を置きながらアドニスがセレスに言った。

「わかったわ。」セレスは暖炉の上にある火起こしの小枝を取り出

した。

特別な薬品が塗ってある部分を暖炉の石で勢いよく擦り、小枝に火を点す。

薪の上にある小さな小枝に落とし、暖炉に火を入れた。

火掻き棒を持ち、薪に火を移しているセレスの頭にタオルが落ちる。

「湯の用意が出来るまでそれで拭いとけ。」

「ありがとう。」片手で頭を拭きながらセレスは言った。

アドニスは埃を立てないように、注意深く布を取っている。

雨戸を閉め切った外からごうごうと風の音が響く。

薪に火が移り、その炎が部屋を照らした。天井が普通の民家より遙かに高い。

アドニスは長身だ。その上大剣を振り上げる。

その為にこの家を選んだのだらうとセレスは思った。

辺りを見回す。そういえば他人の家を訪問した事など無かった。

街に向う途中アドニスに借金を申し込み、宿の手配をすると言ったら怒られた。

「この馬鹿が！借金増やすな！」でも、アドニス！！」

「ゾルデで世話になってる。そのくらいの恩は俺は返すぞ。」

「貴方、自分は恩人だって私に言っただじゃないの。」

セレスが息を上げながら言う。

風と雨雲が二人を急ぎ立てる。

「そろそろ返してもらうか。」

アドニスの呟きを突風が彼方へ運び去った。

暖炉の前で髪を拭くセレスに奥から低い声がした。

「湯、先に入れ。剣の手入れはその後しろ。」

「あの・・・」着替えをどうしようと思った時、

「今日はこれを着てろ。手入れの道具は俺が出しておいてやる。」

アドニスが髪を片手で撫で付けながらセレスに街と同じ色のシャツ

を差し出した。

水滴が濡羽色と曲げた肘からばたと床に落ちる。

此処はアドニスの家だ。それを差し置いて自分が先に湯に入っていないのだろうか。

セレスはじつとアドニスを見る。そして小さなため息を吐いた。

セレスは黒檀のシャツを取り浴室へ向った。

「シャツまで黒とはお見事ね。」呟く声の後、扉を閉める音がした。

髪を拭きながらセレスは浴室から出てきた。

部屋には暖炉以外の灯りも入っている。

アドニスは頭を拭いたタオルを首に掛け剣の手入れをしている。

戦士の大切な儀式。邪魔をするつもりはないから、暖炉の前の敷物に座り髪を拭く。

背中の気配が立ち上がり、最後の確認に入るアドニス。

セレスも立ち上がり横からアドニスを見る。唇に手を当て、緑青が僅かに細まった。

ゆっくり持ち上げ、ゆっくり下ろす。それだけの動作に隙が無い。

あの時勝てたのは本当に偶然の産物だ。

解ってはいた事だが、この度の護衛の仕事で改めて思い知らされた。

アドニスは手入れの終わった大剣を鞘に収めた。

「オマエの道具は出しておいた。」セレスにソファアの上を顎で指す。

ソファアの前に敷物が敷いてあり、その上に道具が置いてあった。

セレスはソファア向かい出す。

女性としては長身の部類に入るセレス。シャツの丈は膝の上で切れていた。

髪が黒檀の上で静かに揺れる。

「ありがとう。」白い脚が暖炉の光を映していた。

ソファーの前に座り、剣の手入れを始めた。

かつて自分が纏っていた鎧と同じ色の剣。昔の自分が還って来た様だ。

刃に自分の髪が映る。血の色をした自分の髪。

捨てたかった。でもそれは出来なかった。

剣を捨てたら、私は生きていけない。

刃の確認をし、剣を静かに収めた時ソファーに人が座っているのに気付いた。

「頭拭いてくれ。」タオルがセレスの肩に掛かった。

「自分でしなさいよ。」

「ケツ、恩人に対する態度がそれか。」

小さくため息を吐くとセレスは立ち上がりソファーの横に剣を置いた。

そしてアドニスの前に立ち、濡羽色を拭き始めた。

- - - - -

「やっと認める気になったか？」タオルの下から低い声がした。

「・・・ええ。」小さな呟きが二人の間に落ちた。

アドニスはセレスを扶る。

苛烈なアドニスは容赦ない。自分にも、他人にも。

「腐れた事しやがって。」

斬鉄姫に斃された連中まで腐らすつもりだったのか。てめえは。」

アドニスの首が見える。

かつて自分が刎ねた首を突き付ける。

腿の上で折り曲げていた肘をアドニスは持ち上げた。

黒刃を持つ手で斬鉄姫の腰を掴む。

「年と共にいずれは持てなくなる。それには反対しない。俺もそうなる。」

苛烈な言葉と手の力は腰を砕く。

「だがオマエのやり方は極端だ。女が一人で生活していればそれなりの危険もある。」

他人に守ってもらう考えが無いんだから、自分の身ぐらいは自分で守れ。」

黙ったままセレスはアドニスの頭を拭く。

「環境の変化に自分が追い付かないなら、

小さくても僅かな時間でもいい、オマエのままでいられる場所を探す努力をしろ。」

つまんねえ本ばかり読んでないで少しは動け。」

アドニスの頭を拭く手が震える。

「あの時、俺がいなかったらどうなってた？」

「死んでいた。」

「今は？」

「剣と共に生きている。」

「後悔は？」

「していない。」

「ならいい。二度と腐れた真似すんじゃねえぞ。」

アドニスは右手をセレスの腰の後ろに廻しばんぽんと叩く。

返事するように緑青から涙が落ちた。

アドニスはセレスの手首を掴むと立ち上がり、あとは自分ですと言った。

俯くセレスの顎を持ち上げ顔を自分に向けると、白い頬を二つの筋が伝った。

「不細工だな、おい。」タオルでごしごしとセレスの顔を拭きながらアドニスが言った。

「私は、元々不細工だわ。」泣き笑いのセレスが言った。

「オマエ、もう寝ろ。」タオルを顔から離して自分の頭にかけていく。

ソファ―に座るアドニスに静かな声が降り注ぐ。

「アドニス。」

頭を垂れて髪を拭いているアドニスは返事をしない。

「何故、親切にしてくれるの？」

セレスにとって小さな疑問。アドニスにとっては大きな問い掛けだ。

「起きてたら教えてやる。」

セレスは黙って寝室へ向かった。

髪はほぼ乾いている。

暖炉の前で濡羽色の髪を撫で付けながらアドニスは小さく笑った。

「あの時、俺はてめえに不覚を取った。覚悟は出来たか？」

黒檀の街は雨と風の喧騒を奏で、全ての音を飲み込んだ。

- - - - -

寝室に入るとセレスが寝台に座っていた。

膝を伸ばし腰まで掛けた布団の上に両手を置いている。

雨戸を見ていた顔がアドニスを見た。

肌は黒檀のシャツと闇を映し灰白色に見える。

雪豹が自分を待っている。

スカピア渓谷で見たあの雪豹をアドニスは綺麗だと思った。

其の二十二 赤銅色（しゃくどういろ）

セレスは前を見たまま動かない。

視線を横切りアドニスは布団に入り左手で肘枕を付いた。もう一方の手で赤錆色の髪を弄ぶ。

「教えてもらうわよ。」凜とした声は前を見たままのセレスの口から出た。

「オマエはどう思うんだ？先に教えるよ。」

雨戸の先から雨と風の音がする。喧騒の中、この部屋は静寂が支配していた。

「もう一度勝負を申し込まれる。不覚を取り戻す為に。」
「てめえはよく解ってる。」

「もう一つくらい思いつけ。」

アドニスはセレスの髪をついついと軽く引っ張った。

少しの間の後、セレスは前方を見たままひどく真面目に言った。

「タダ働きをさせられる。私、アドニスに借金してるから。」

アドニスの口が開き、次の瞬間咽で笑い出した。

「何が可笑しいの。」低い声でセレスは唸る。

アドニスは起き上がり、セレスの肩に顔を埋めた。笑いは止まらない。

左手で自分の体重を支え右手でセレスの腰を抱く。

いちいち普通の女と反応が違う。やっぱりオマエがいい。

「・・・何が可笑しいのよ。」殺気を帯びた声がする。

アドニスの閉じた瞼が眉と同じ緩やかな弧を描く。

白い首筋を唇と笑いを含んだ息が撫でた。

「オマエ、俺が口説いてたって気付いてねえだろ。」

「・・・・・・・・え？」

「だから口説いてたって言っただろうが。」

セレスは言葉の意味を理解するのに時間が掛かった。

暫くの後、一つの言葉がアドニスの背中に落ちた。

「・・・・呆れた」前方を見たまま言葉通り呆然としている。

本気なのでもなく、遊びなのでもなく「呆れた」と言うセレス。

「気付けよ。」

嬉しそうにアドニスは言った。

「・・・・いつからなの。」

「一年以上。」

アドニスの返事に今度は絶句するセレス。

アドニスはまだ笑っている。

風と雨の音は鳴り止まない。

搾り出すように斬鉄姫は言葉を吐いた。

「一生の不覚だわ・・・・」

自分の首を刎ねた女。

その斬鉄姫の首に小さく尖った唇を優しく押し付けた後、

臉をゆっくり開きながらアドニスは言った。

「落とすのに一年以上かかったぞ。」

嵐の夜、赤銅色が光る。

前方を見るセレスの両眼が大きく睜られた。

- - - - -

再会は偶然だった。

あの時、セレスの家の前を通らなければ一生会う事は無かっただろう。

二度目は本当に夜中に着いて、宿が閉まっていたからだ。

野宿するつもりで荷を開けていたら、合鍵が出てきた。

女の一人暮らしは危険だ。

珍しく親切心を起こし、錠前屋に恋愛中だと言ったら勝手に作つてれた合鍵。

荷袋に入れっぱなしにしていた鍵。その鍵が出てきた。だからセレスの家に泊まった。

寝台は一つしかないから二人で寝る。一眠りしたら、出て行けばいい。

肌寒いから腰に手を廻した時、気付いた。

腹が前より硬くなっている。

鍛錬している。

確認する為に布団をそつとはぐつて、セレスを起こさないように注意深く腕を触った。

腕は締まっていた。腿も硬い。前に会った時と違う身体。

自分の口が吊り上るのを感じた。

子供の様に柔らかい腹をした無様な女。子供だから優しく出来た。それだけだ。

宿に困っていなければ、合鍵が出てこなければ、会う気など微塵も無かった。

過去に囚われ、だが戦士である過去を捨てたがる、不器用な女。

その女が身を守るために鍛錬を始めた。

脅しても怯まない女。逆に威嚇してきやがった。

「持ちたくない。」

女の一言は戦士である自覚だ。

俺を怖がらないのも、戦士としてしか見ていないからだ。

差は火を見るよりも明らかだ。勝敗が確定している以上、恐れても仕方が無い。

一つの可能性が見えた。

俺はてめえに不覚を取った。

負けは負けだ。

その俺に捨てたがつてる剣を持たされ、
もう一度勝負を申し込まれたらどうする？

拒絶は屈服を意味する。

受ければ確実に負けだな。

警戒すると思つたらすんなり受け入れた。しかも必要以上に干渉しない。

その大雑把さが心地いいと思う自分に気付いた。

だから長期の護衛の話が来た時、引つ張り出そうと思った。

腕は確かだ。おまけにあの性格。オマエなら俺の相棒としてやっていける。

それだけの理由で俺は他の奴では無く斬鉄姫を選んだのか？
だからあの夜、自分を、オマエを試した。答えを出す為に。

剣を捨てて生きていける戦士はいる。

それはひとつの生き方だ。

オマエが捨てても生きていけるなら俺は構わない。

だが、オマエは剣を捨てて生きてはいけない。

斬鉄姫が簡単に生を放棄する。

斬鉄姫に勝負を挑んで斃れた連中はどうなる？

何の為の解放だ？

生きる為の解放だろうが。

そこまでして捨てたいのなら俺が違う剣の使い方を見せればいい。

セレスがセレスのまま生きていける様に。

斬鉄姫が斬鉄姫である事を受け入れられる様に。

俺は斬鉄姫が「欲しい」。斬鉄姫は「女」だ。

「女」ごと欲しい。

- - - - -

斬鉄姫は自分で出した答えを受け止めた。

戦士は、自分の始末は自分でつける。

人を斬った後、一人で嘔吐し、咽に指を突っ込んで吐いた。
やっとなめた。剣を捨てたら生きていけない事を。

セレス、斬鉄姫を認めてやれ。

斬鉄姫はセレスの剣だ。

オマエは剣を捨てたら生きていけない。

斬鉄姫を必要とする者、斬鉄姫を理解する者がいる。

それさえ知ったらオマエは壊れない。俺が壊させない。

そう思った時、目の前で吐いている存在を初めて愛しいと思った。
その感情を抱いた自分にひどく驚いた。

屈服させたい、負かしたい、欲しい、愛しい。

否定は一切しない。どれも俺だ。

雪豹が嘔吐する。獲物の血に頭を染めて。

セレス、斬鉄姫はオマエの牙であり爪だ。

雪豹の様に必要な時だけ牙を剥き、爪を立てればいい。

それだけの事だろう？

俺はそのままのオマエが欲しい。

だから気付かせなかった。

戦場以外のオマエを初めて知った。意外性のカタマリにも程がある。

普通の女の様な反応をしない。そもそも女の部分が少なすぎる。

鷹揚かと思えば冷静に状況判断をする。

目を抉ろうとしたら止める。俺の事をちゃんと見ている。

なのに自分の事は見えていない。鈍すぎる。

いくら「大雑把」で「鈍い」とはいえ相手は肉食獣だ。

肉食獣の感覚は鋭利だ。小さな物音でも警戒する。

だから足音を忍ばせながら距離を縮める。

そして待つ。オマエが自分の周りを見回すのを。

結果的に一年以上かかった。そこまで俺を本気にさせやがった。見逃してやるつもりは無い。気付いた時は、もう遅い。

- - - - -

セレスは寝台がぱっくり口を開け、落下する感覚に襲われた。文字通り、「落ちた」。

アドニス「口説いていた」と言った。
あの態度、言動。どこをどう考えても全然、全く「口説く」にならない。

気付けという方が無理だ。

・・・いや、一度警戒したことはある。
娼館で自分の髪を「綺麗」と言った時だ。
今思えば、初めての褒め言葉だった。

聞いた瞬間、「油断ならない」と思った。

自分が嫌いな髪が何を意味するのかアドニスと同じだったただけだ。
自分が嫌いな色をアドニスが綺麗と言っただけだ。

いつもと同じで何か違う。小さな警戒。

でも、その後コップに水を注がれていつもの「油断ならない」になった。

小さな警戒はいつも通りのアドニスの態度が飲み込んだ。
気付かせなかったのだ。

黒豹は一年以上前から自分に覚られる事なく、じわじわと背後から忍び寄ってきた。

ここにきて初めて艶やかな濡羽色の毛に隠れている自分の斑紋を、誇示した。

黒豹の斑紋は触れる距離でないと見えない。

いつの間にかアドニスの家にいる自分。

此処はアドニスの領域だ。

そのアドニスは自分の喉元で笑っている。

くつくくくつ・・・

口を閉じているから咽で笑う。閉じた口の中には何が潜んでいる？
両手がのろのろと布団を掴む。

セレスは自分の肌が総毛立つのを感じた。

- - - - -

「一生の不覚だわ・・・」俺の全てにお前は応えた。

アドニスはそのりと顔をあげた。

サイドテーブルの灯りは細くなり、ちろちろと瞬いた。

濡羽色の艶が瞬く。

アドニスの右手がゆつくりと腰から離れた。

鳥肌を立てている滑らかな灰白色の輪郭を指で確かめる。

自分を見つめる緑青は灯りが瞬く度に翠にも蒼にも見えた。

アドニスは赤錆色の髪をかき上げながらそつと囁いた。

「俺が怖いかな？」

全てを受け入れる強さ。

戦士として俺に劣る事をちゃんと解っている。

俺が逃がすつもりがない事も知っている。

甘える事を知らない。

俺が擦り寄る。オマエは俺を受け入れる。その事が俺に甘えている
事になる。

オマエは優しい。

娼館で俺の手が下衆の血で染まる事を拒んだ。掌の口付けでそれに気付いた。
だから欲しい。だから愛しい。そのままのオマエがいい。それ以外は要らない。

「怖い。」

黒刃のアドニスとは自分自身にも他人にも容赦しない。
貴方は全てを容赦なく呑み込む。逃れる隙を与えなかった。
髪も服も全てを呑み込んだ色。黒い獣。
したたかでしなやかな美しい黒豹。
戦士としてのアドニスは怖くない。私は貴方より劣るから。
捕らえたら私が足掻く事をしないのを貴方は知っていた。
私は今、その事に気付いた。
だから目の前の男は、一人の男としてのアドニスは、怖い。

「上等だ、セレス。」

髪を解放した手は輪郭を滑り顎を持ち上げる。
セレスの顔を濡羽色がゆっくり覆った。

- - - - -

寝室は闇に沈んでいる。

朝なのか昼なのか夜なのか。

沈んだ時の中を斑紋の背中が動きだす。

重なった手はそのままに、むくり、と上体を起す。

「・・・ここ・・・どこ・・・？」

頭がはつきりしていない様子の声が風と雨の音の中で響いた。
外の嵐は収まっていない。サイドテーブルの灯りは遥か昔に失われた。

左手がアドニスの腕を掴んで体重を支え、緑青が辺りをゆっくり窺う。

「俺の家だ。」声する方へ頭が動いた。
斑紋を身に宿した雪豹が首を傾げる。

「今日中に収まるといいがな。」

風と雨の音の中での声を聞こうと雪豹は深く首をかしげる。
「寝とけ。」

セレスの手が乗った腕をずらし、重なった手を解きながら
アドニスは自分の喉元に赤錆色を落とした。

セレスはアドニスをぼんやり見つめ、

「黒い・・・ボサボサ・・・」

言いながらのろのろと左手でアドニスの濡羽色を撫で付けた。

「言ってくれるな、てめえ。」

「・・・でも・・・綺麗・・・」

手は濡羽色に落ちたまま、微笑みながら言葉と共に瞼を閉じた。
小さく、規則正しい息がアドニスの喉元に降り注ぐ。

「・・・可愛いじゃねえか。」

うつかり出た言葉は深く眠るセレスには届かない。

アドニスはセレスの頭を抱え込む。赤銅色の両眼は緩やかな弧の下
に隠れている。

「この不覚もきつちり返させてもらうぜ。」

鼻先でセレスの額をなぞりながら宣告した。

黒豹はくわあと欠伸を一つする。

二匹の豹は眠りの海へと沈んだ。

其の二十三 千紫万紅（せんしばんこう）

ゾルデを出発してから5ヶ月が経った。

今、そのゾルデに帰ってきた。

旅立ちの時と同じ薄群青の空の下を、黒紅の二人が歩く。

ゾルデはまだ眠っている。かつての賑わいを取り戻すのにはまだまだ時間が掛かりそうだ。

商人とは郊外で別れた。セレスが住んでいる街だと知って、一人で寄合い所に向った。

必要以上に詮索しないのが商人の身上でもあるのだ。

セレスが鍵を開け、家に入ると室内は綺麗に掃除されていた。

出発前、フィレスが合鍵を預かると言った後、

時々掃除に来るから埃除けはしなくていい、と笑った。

荷を床に置き、セレスは白銀の剣をソファアの横に静かに置いた。

アドニスは黒刃を白銀の横に立て掛けた。

二人はソファアに座る。

「5ヶ月……。長かったわね。」

「オマエが騒ぎを起こさなけりゃもつと短くて済んだのになあ、セレス。」

ソファアの背もたれに伸ばした手で赤錆色を弄びながらアドニスは言った。

死ぬ思いで吐いた事、娼館で怒鳴った事を「騒ぎ」の一言で片付けられた。

「借金は作るわで大いに迷惑だったと言いたいでしょ。」

濡羽色がセレスの肩に落ち、アドニスの手がセレスの腰を抱く。

「痩せたり太ったり、腹也大いに迷惑だ。」

「……アドニス、言っている事と悪い事があるわよ。」

アドニス是一片手で器用に帯剣用のベルトを外した。
セレスの肩に濡羽色をのせたまま、しばらくベルトを眺めた後、持ち主に返した。

「二つか。オマエ解つてたのか？」ああなる事を、と言外に問う。
黒紅の刺繍と同じ模様を刻んだ黒いベルトを見ながらセレスは言った。

「一つで足りると思つてた。」

「もう一つは？」アドニスは容赦なく問いかける。

「・・・・・・見栄。」きつく前方を睨みながらセレスは低く唸る。
一瞬の間の後、アドニスは唸った首に顔を埋めて笑い出した。

斬鉄姫が見栄を張る。タダ働きといい、オマエ今度は俺を笑い殺す気か。

「そんなに笑わなくてもいいじゃない！」セレスは声を荒げた。

くつくつく・・・・・・。声と共に黒い肩が小さく上下する。

「笑いすぎだわ・・・・」

止まらねえんだよ。

赤銅色は緩やかに弧を描いた瞼の下に隠れている。

「アドニス・・・・」殺気を感じてアドニスはとどめを刺した。

「やっぱり張つてたのかよ、斬鉄姫。」

・・・・・・

夕方には少し早い時間、フィレスが食材と共にやつてきた。

昼間、家の前を通つた時に窓が開いていたからねー、と笑つた。

姉はソファーに座り、姉の腰を黒い刃が捕らえている。

それでもアタシの姉さんのよ！

外野などお構いなしにフィレスは姉の前に立つ。

おまじないの合図。姉は妹に、妹は姉に手を伸ばす。

姉妹はお互いの鼻を人差し指でちょんちょんと撫でる。

「おかえりなさい。」
「ただいま。」

セレスはアドニスに手を重ねた。離脱の合図だ。黒い刃が腰から離れる。

ソファから立ち上がり、荷から本紫の包みを出した。

「おみやげよ。」微笑みながらセレスは言った。

「うわぁ。いいの？」姉の両手にある包みを解くと、葉と花が描かれた瓶が現れた。

「香りだ！当然アタシが花よね！！」

フィレスの嬉しそうな笑顔と声がセレスに向けられる。

「もちろんよ。」綺麗な笑顔がフィレスを包む。

「流石姉妹だ。」アドニスは呟いた。

旅の事、娼館での出来事を夕食を三人で摂りながら話す。

「で、本紫を受け取って代替りの立会いをしたの？」

「成り行きでそうなったのよ。私も吃驚した。」

「演舞！アタシ一度しか見て無いのよ！ずるいー！」

外の世界の出来事を楽しそうに話す姉を見て妹は喜び、一抹の寂しさを感じる。

「あ、アドニスそのカップ取ってよ。」

アドニスはテーブルの端にあるカップをフィレスに無言で差し出す。

「ありがとう。」フィレスの小さな言葉が空のカップに落ちた。

「器用だな。」アドニスは椅子から立ち上がると浴室へ向かった。

斬鉄姫セレスを落としたのが黒刃のアドニスとはね。

・・・でも、アンタで良かった。

空は紫黒に染まり、三日月が月白の光を下界に注いでいた。

- - - - -

「いつ出るの？」寝台で寝間着が問う。

「二日後。明け方だからメシはいらねえ。」

セレスの頭に顔を埋めたアドニスが答える。

「そう。助かるわ。」

「こつちを向け。」

「・・・前にもあった。」セレスは体勢を変えた。

緑青が赤銅色を見つめる。アドニスの手はセレスの右手に重なる。斬鉄姫の掌を唇で撫でながらアドニスは訊いた。

「セレス、俺を愛してるのか？」

「え？」セレスの声がアドニスの顎に掛かる。

そして静かにアドニスを見上げる。

「アドニスを愛してはいけないの？」

アドニスは笑いながら両腕でセレスの頭を抱いた。

愛してるわでもなく、貴方の気持ちを知りたいでもなく。

「そう来るか。」

アドニスの可笑しそうな声がセレスに降り注ぐ。

「何が可笑しいの？」アドニスの喉元の唇が言葉と共に動く。

「可笑しいから笑ってんだろ。」くすぐったい。

「だから、何が可笑しいのよ。」

笑いながらアドニスは言った。

「オマエ、本気で借金してると思ってたんだろ。」

セレスは跳ね起き、両手を突きアドニスを見下ろす。

あまりの勢いで跳ね起きた為、布団が大きくめくれた。

「違うの？」寝間着の布がアドニスの胸に触れる。

「違えよ。」布は上衣を着ていない肌を撫でる。

「出来高が付いたぜ。」

啞然としているセレスの顔を両手で挟む。

「オマケに鞘はどうしても収めさせてもらつと武器屋がゴネた。」
にやり、とアドニスは笑った。

「・・・アドニス。」突いた両手が枕をきつく握り締めた。
「怖いから睨むなよ。」肘を深く曲げる。
赤錆色がアドニスの顔を覆った。

俺だけ愛してたんじゃない不公平だろ。
斑紋を刻みながらアドニスは言った。

- - - - -

金色の太陽が出番を待つ空の下
アドニスとセレスは寄り添い、玄関に立っている。
アドニスは赤錆色が覆う首筋に顔を埋める。
出発の合図だ。

セレスは返事の代わりに濡羽色を撫で付けた。
二人は今まで通り護衛の仕事をし、書庫の仕事を
だが、今まで知らなかった色を知った。
夜が明ける前の空が刻々と色を変える。
今とは違う色がめまぐるしく世界を染める。
そして空も大地も風も色を変える。

―千紫万紅―

世界は色で溢れている。
一人一人の人生にも溢れている。

- - - - -

そして月日は流れる。

数ヶ月後の早朝、ゾルデの民家の玄関を勝手に合鍵で開けたアドニ
スは
剣を持ち散歩に出ようとするセレスと再会した。

「オマエ、教会の仕事休め。」

「・・・今度はどのくらいなの？」

千紫万紅・後編 終

試作品

「月」

「出席しなくてはいけないの？」

「姫様、わがママを言わないで。」

乳母がそういうから、仕方なく夜会へ出た。

夜会は嫌いなものよ。キツイ服を着なくてはならないし、髪や顔をいじられる。

私は女に生まれたく無かった。でも現実とは思いと違う。事实は受け止める。

さつさと広間から抜け出して、庭に出た。夜会は始まったばかりだから人影はない。

大きな木の根元に座り、きつい靴を脱ぐと、やっと安心した。

髪は複雑に結ってあるから、手は出せない。

服も脱ぎたいけど、取り敢えずは我慢しよう。

足を伸ばして星を見る。久しぶりのデイパン。

月が欠けている。あの月が満ちる頃はまだ此処にいる事ができる？
ひととき月を眺めた後、庭の奥に一人の男が立っているのに気付いた。

男は月を見ていた。

「誰？」私の問いかけに男が振り向いた。

背は高い。だが線は細い。平凡だが優しい面立ち。

着ている服がローブでなければ、身分の低い男と間違えたに違いはない。

そんな、普通の男だった。

「綺麗な月ですね。」

柔らかな物腰。柔らかい笑み。私と正反対だ。

「そうね、綺麗なわ。」私も月を見る。

こんな人が女に生まれるべきだったのに。

神は随分と意地悪だ。

男は静かに此方へ向ってきた。

何故か、警戒する自分がいる。

「セレス嬢、夜会はいいんです？」

静かに笑いながら問いかけた。

「いいのよ。挨拶が終わり、夜会の開始まではいたから。」

ディパンの国力そのものの傲慢な言い様だった。王家の血がそうさせた。

「私と同じだ。」くすり、と男が笑った。

礼儀正しそうな人だけど、そんな大それた事して大丈夫なの？
小さな疑問を抱く。相手は見透かしたように言った。

「貴女と会わせる為の夜会でしょう？」

当事者の一人が抜けてしまっでは、私がいる必要はない。」

「貴方、ラッセンの・・・」

「御名答。」月の光の様な、静かな笑みだった。

.....

ラッセンの領主は風流人として名高い。

文に秀でている、と父から聞いた。

足りない武を望んでいる、とも聞いた。

「噂の斬鉄姫はさつさと居なくなるし。仕方ないから月を見ていましたよ。」

「ずいぶんな嫌味ですこと。」

「おかげで会うことが出来た。月に感謝です。」

座る私に降り注ぐ月の光。

「武を望んでいるのでしょうか？」

「最終的には。そうならない様にするのが領主ですけどね。」

ラッセンは弱い。だが、したたかに生き延びている。

領主が知恵袋なんだよ、とは兄の言。

「決まっている事でしょ。」

「でも、セレス嬢の意思は別問題ですよ。」

「私の意志など、問題にならないわ。」

王がそう決めた。だから嫁ぐ。

市井の男女の様に、意思など尊重しない。それが王家の婚姻。

「ラッセンに来て、剣を捨てるつもりは姫など必要ありませんから。」

目を瞠る自分がいた。警戒が強くなる。

「貴女は女を盾に剣を捨てる。それは誰も口を挟めない。」

月の光は小さな棘となり、私に降り注ぐ。

「軍事同盟で済む話に、ディパン王は斬鉄姫に女を求めた。赦せないのでしょうか？」

ちくちくと心に刺さる。

「そんな姫はお断りです。私は望んでいません。」

持ちかけたのはディパンです。ラッセンが断れば丸く収まる。

貴女は斬鉄姫のままでいられる。」

血塗られた私。剣と共に生きる私。

「貴女には無理だ。剣を捨てる事も、女を捨てる事も。」

選択を迫られたら即座に剣を選ぶ。そういう女性ですよ。」

「・・・油断ならないわね。」

- - - - -

それから何度も会った。

月は書物の世界を覚えてくれた。

「知っておいて損はないでしょう?」

月光が降り注ぐ。

穏やかな人。

何故か会いたいと思う私。

「鈍い」と笑う兄と妹。

その間にも小さな戦があった。私は戦場に出た。

そして戦場から還ったある日、月の夜に久しぶりに再会した。

「おかえりなさい、斬鉄姫。」

「今日はどうしたの?」

「求婚をしに出向いてきました。」

「誰に?」

「貴女ですよ、セレス。」

「正気なの?」

「はい。」月の様な笑み。

「確かに斬鉄姫を求める人はいるけど、大抵は途中で消えていくわ。」

「おやおや、根性の無いことだ。」

まあ、最後まで残るのは余程の物好きか変態くらいですね。」

あまりの言い様に呆然とした。

「・・・そうかも知れないけれど、それはあまりではないの!?

「じゃあ、貴方は余程の物好きね。変わった人だわ。」

言葉に棘が含まれるのは、仕方ない事だ。

「いいえ、私は変態です。」にっこり笑って

「自信があります。」の言葉と共に月の光が降り注ぐ。

「・・・呆れた。」

翌日の夜、あの庭で返事をした。

「私の伴侶が変態、というのだけは受け入れられない。」

「わかりました。物好きで我慢します。」

静かに笑うと月は私を抱き締めた。

「泣ける時に泣いた方がいいよ、セレス。」

「何故、言うの？」

月は血の色をした髪を自分の口元に引き寄せる。

「戦士は次の保障が無い。為すべき時に為す。」

「怖い人ね、貴方。」

「私は貴女を支える。貴女が貴女のままにいられる様に。私はそれだけを望む。」

貴女は他の女性の様な態度を私に向けなくていい。そんな貴女など望まない。

セレスが欲する場所が私だけの事。」

「やさしい言い方をするけど、随分と傲慢だね。」

月は口許の髪で私の鼻を撫でる。

「男は誰も傲慢ですよ。愛しい女性に対してはね。」

「それが愛の言葉なの？流石・・・物好きだね。」

私は月に顔を埋めて笑った。

ひっかかりませんでしたか。

月は残念そうに囁いた。

政略結婚と言われた。

女性としてあの人の子供を産みたいと思った。

その感情が芽生えた時、奇襲された。

黒刃は違う。自分で自分を支えろと言う。

でも、私が私でいられる生き方を教えてくれた。

- - - - -

「いつか、私より上手がセレスを捕らえるかもしれませんね。変態はその人の為にとっておきましょう。」

婚姻の日の夜、深い眠りについたセレスに月の言葉が降り注いだ。

- - - - -

「・・・で、俺は変態なのか？」

「・・・怒らないでよ。」

寝台の端に座るアドニスの頭を拭きながらセレスが言った。

言いたい事があるなら吐き出せ、と言われた。

失礼になるからと断ったら、今まで十分失礼な態度を受けたと怒られた。

「いい度胸してんじゃねえか、セレス。」

タオルを持つセレスの手首を掴みながらアドニスが言った。

アドニスはゆっくり顔を上げる。

セレスを見ると口許が歪んだ。

ぞくり、と白い肌が粟立つ。

「オマエ、知ってるか？類は友を呼ぶ。」

「・・・私も変態だって言いたいの？」

「オマエの変態ぶりを堪能させろ。」

全てを呑み込む黒。夜空は月をも呑み込んだ。

限定品

「ザルとウニ」

「おい、その馬の尻尾。」

すれ違う瞬間に掛けられた声を見殺した。
自分の全身を白銀が覆っている。

「暴れ馬、てめえだ。返事くらいしろ。」

無視して離れようとしたら、腕を掴まれた。

「俺を見殺すんなぞ、100年早ええよ。」

全身を黒い鎧が覆い、顔を黒い兜が覆っていた。
血なまぐさい眼が不気味に光る。

「なによ、金平糖。」

血なまぐさいを通り越して殺気を帯びた。

「いい度胸してんじゃねえか。ああ？」

変な夢。金平糖？確かにそうかも。

「鈍いクセに生意気な口ききやがる。」

散々フィレスや兄に言われた事を、今！何故！！言われなければならぬのよ！！

・・・少なくとも戦場では鈍くはない。

「金平糖に言われる筋合いはないわ。」

腕を払いながら斬鉄姫は言う。

「てめえは鈍いから鈍鉄姫だな。お似合いだ。」

全身真っ黒の男は馬鹿にした口調で言う。

何度も言わなくてもいいでしょ！

「棘棘しいわね。金平糖を通り越してウニだわ。」

「言いやがったな、鈍鉄姫。容赦しねえぞ。」

ぽんっ 何の音？あら、ウニが一つ宙に浮いてる。

「え？？？」

「てめえ、いい加減にしろよ。」

ウニがしゃべるの？？っ痛！

痛い！痛いわよ！

「痛い！！！」涙が出るじゃないのよ！

「無様だなあ、鈍鉄姫。」

ウニは白い鼻先をちくちく突付きながら傲慢に言い放つ。

・・・ウニに無様といわれる筋合いは無いわ！

うごうごするウニを睨みつける。

「俺がウニなら、てめえはザルだぜ。ザル鉄姫。」

どすん え？？鉄のザル？？

ぽんっ・・・ウニって、分裂したかしら・・・

どどどどど 雪崩のようにウニはザルに落ちる。

「痛い！痛いわよ！！！」

「ザル鉄姫のくせに、生意気に痛覚はあんのかよ。」

早くこの場から逃れないと。でも、身体が重い。

「容赦しねえと言ったぜ？俺は。」

ウニはザルでうごうごしている。

すごく痛いよ！ウニなんかじゃない、この・・・

「サドニスー！！」

- - - - -

「．．．ここ．．．どこ．．．？」

夢．．．何の夢．．．だった．．．？

起きな．．．きゃ．．．護．．．衛．．．

声．．．した．．．

黒い．．．ボサボサの．．．頭．．．誰．．．？

「寝とけ。」

ああ．．．眠っていい．．．の．．．ね

もう．．．少．．．し．．．眠り．．．たかつ．．．私．．．

非売品

「黒豹・雪豹・豹・雲豹??」

とある朝、アドニスがゾルデの民家に合鍵で勝手に入ろうとした時、鍵は開いていた。
扉を勝手に開けて中に入ると、セレスはソファアに座っていた。
いつもなら教会に出掛けている時間だ。

「オマエ休みか？」

我が物顔で荷物と大剣を置きながらアドニスは訊いた。

「休みをね、取ったの。」嬉しそうにセレスは返事をする。

アドニスがいつ来るかはセレスは知らない。服装はいつもと同じ地味だ。

だが、赤錆色の髪が結い上げてある。

うきうきした様子のセレス。

「何処かに行くのか。」

ソファアに座り、白い首筋に顔を埋める。

帰還の合図。セレスは濡羽色を撫で付ける。

「ちよつとね。」につこり笑うセレス。

髪が邪魔をしない。たまにはこういうのも悪くはないと思いながら

「その頭、どうしたんだ？」とアドニスは訊いた。

不器用なセレスが自分で出来る様な代物では無い。

「あ、これはフィレスにしてもらったのよ。邪魔になるから。」

アドニスは自分の頬で首をすりすりしながら更に聞く。

「何処に行くんだ、教える。」背もたれに手を置き、もう一方で腰を抱く。

「あのね・・・」セレスが答えようとしたその時、

「姉さーん、借りてきた！！」
フィレスが勢いよく玄関を開けた。

「・・・アンタ、又来たの・・・。」フィレスの顔が険悪になる。
「早く言えよ、セレス。」

すりすりすり。外野が眼中に無いアドニス。

「フィレス、借りれたの？良かったわ。」微笑むセレス。
姉の膝は幼い頃からの自分の指定席だ。

例えアンタでもアタシの目の黒いうちは奪わせないわよ！！

「こっちはもう使わないからあげるって、教会の賄いさんが言ってくれたの。」

姉は自分の後ろのクッションをそつと足元に置く。

妹はそれに座り姉の膝に顔をのせ両手で持っていたものを見せる。

セレスはクッションを持った手でフィレスの頭を撫でる。

ごろごろごろ。三匹の豹は朝っぱらから仲が良い。

「これでウニ狩りに行けるわね。」

刃の漬れた二本の短剣を見ながらにつこり微笑みセレスは言った。

- - - - -

「何でアンタが一緒なの・・・。」

セレスが台所に向かう背中を視線で追いながら、フィレスはアドニスに唸る。

「俺の勝手だ。」平氣の平左な返事にフィレスの声が更に低くなる。

「邪魔しないで欲しいわ。」

豹は黒豹を睨む。

「流石姉妹だ。威嚇する顔がおんなじだ。」

黒豹の視線は雪豹を追い続ける。

「見もしないでよく言えるわね、アンタ。」

ぐるるるる。静かに唸る豹。

「妹、桶が要るんじゃないのか。」

黒豹は何処吹く風で軽くあしらう。

「外に置いてあるわよ。」

二匹の豹は仲が悪い。

一匹はソファーに座り背もたれで肘枕を付き、もう一方を反対に伸ばしている。

一匹は床に座りソファーに肘を付き、もう一方を床に伸ばしている。尻尾を伸ばして会話は続く。

「例の話、今日するから。」

「準備は？」

「舐めてんの、アンタ。」

「アイツの教会の報酬を半分ガメた事も話せよ。」

「人聞き悪いわね。借りてるだけよ。」

セレスが台所から居間に戻りながら言った。

「今、空いてるザルがこれしかなかったけど。」

細い金属で編んだザル。中には二本の短剣が入っている。

「何でもいいよ、姉さん早くいこ！」

豹は嬉しそうに雪豹を急かす。

黒豹は黙ってソファーから立ち上がる。

とつとつとつ。肉球が床を叩く。

豹は三匹になると仲良くなる。

- - - - -

「ゾルデねえ。」

数時間後、一つの人影がゾルデ郊外に現れた。

黄褐色の豹の斑紋は雲の形をしている。

雲紋を宿した雲豹。

空を、雲が流れる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6767b/>

千紫万紅

2011年5月27日09時55分発行